

# 地域文化を映し出す

河村友佳子・日高真吾編



# 地域文化を映し出す

河村友佳子・日高真吾編



# 地域文化を映し出す

河村友佳子・日高真吾編

## 1. 映画会 願いと揺らぎ

館長挨拶

解説

コメントとディスカッション

司会 日高 真吾

解説 我妻 和樹

小谷 竜介

吉田 憲司

日高 真吾

14

9

5

2. 映画会 明日に向かって曳け——石川県輪島市皆月山王祭の現在

館長挨拶

挨拶

解説

コメントとディスカッション

吉田 憲司

日高 真吾

川村 清志

司会 日高 真吾

解説 川村 清志

35 38 41 44

3. 研究公演 じゃんがら念仏踊りみんぱく公演

館長挨拶

第一部 「開会に当たって」

第二部 「震災から再開したじゃんがら念仏踊りを振り返る」

第三部 「みんぱく研究公演二〇一五を振り返る」

第四部 「コロナ禍でのじゃんがら念仏踊り」

司会 日高 真吾

解説 遠藤 諭

吉田 憲司

70 71 74 75 90 104

# 映画会 願ごと揺らぎ

二〇二二年四月十日開催

## 館長挨拶

吉田 憲司（国立民族学博物館）

吉田 皆さん、こんにちは。今日はようこそ私どもみんなく（国立民族学博物館）の映画会にお集まりいただきましてありがとうございます。館長の吉田憲司でございます。

この映画会は、みんなくで現在開催しております特別展「復興を支える地域の文化―3・11から10年―」の関連行事として開催するものです。

3・11、東北地方太平洋沿岸を巨大津波が襲った東日本大震災からちょうど十年がたちました。あの日、実は私は前夜から三陸の宮古に泊まっております、翌朝、北の久慈へ移動して地震に遭いました。その後、盛岡まで移動して数日間避難をしております。その後、大阪へ戻ってきたわけですが、一人で逃げ帰ってきたような思いがしまして、被災地から離れた大阪にいる自分、あるいは自分が所属している博物館に、一体この未曾有の災害に関し



て何ができるかということはずっと自問しておりました。

大阪に戻ってすぐに大規模災害復興支援委員会という委員会を立ち上げて支援を始めました。その際、保存科学が専門で、支援活動の中心となって特に文化財レスキューに当たってくれたのが、今回の特別展の実行委員長である、そして今日の映画会の企画をしました日高真吾教授です。

震災の直後は、コミュニティの存続自体が危ぶまれるなかで、芸能どころではない、祭りどころではないという声も聞きましたが、実際には被災地では例年以上に祭りや芸能が活発におこなわれました。それは、人間の生、生きること、人間の存在、あるいはコミュニティの存続にとつての有形無形の文化遺産の重要性を改めて認識させられる出来事でした。震災からの復興に当たっても、地域の祭りや芸能は人々の結束のよすがとなって、また地域コミュニティを立ち上げていく上での原動力の役割を果たしたかと思えます。

ただ、そこには復興に向かう道筋のとり方でさまざまな葛藤があったであろうことも想像にたたくありません。今日の映画は、宮城県南三陸町波伝谷（はでんや）の春祈禱と呼ばれる祭礼の復興をめぐる地元の方々の葛藤の軌跡を、映画作家の我妻和樹さんが地元で張りついて追われた作品、「願いと揺らぎ」です。作品を監督された我妻和樹さんについてはこの後の解説に譲りますが、私たちみんなの復興支援のチームがそのプロジェクトを立ち上げて最初に訪れた場所が実はこの波伝谷でした。

波伝谷、波が伝わる谷と書きますが、波伝谷はその地名のままに津波に関わる伝承をさまざまな形で伝えている地域です。この地域には戸倉神社という神社があります。春祈禱の獅子頭が納

められているのが戸倉神社です。津波が来ると戸倉神社のある丘の周りを海水が取り囲んで渦を巻くと言われ、今回の津波でも実際に戸倉神社のある丘だけが島となって残って、周りは海と化したといえます。ただ、戸倉神社は地震による被害は受けましたけれども、津波の被害は免れています。どうも神社の立地には過去の津波の経験が無言のうちに刻まれているのではないかと思います。

今日の映画の上映の後には、我妻和樹監督と日高真吾教授の間でのデイスカッションの場も用意しています。

ところで、今日この会場にお越しの皆さん、とくにみんなの講演会、映画会にこれまでお越しいただいたことのある皆さんには、少し雰囲気が違うなというふうにお感じいただいたのではないかと思います。そうです。舞台、ステージがどんどん前へ張り出してきて、階段状の椅子の席とぶつかるところまで拡大されています。その上に観覧用の椅子が並べられて、いわばお客様も舞台の上に乗るといっていい形になっています。素材はステージと同じヒノキの無垢材、文字どおりのひのき舞台。お客様にもひのき舞台上がっていただくというのが、今回の講堂の改修のコンセプトでした。

実は今日は、新しい講堂、みんなくインテリジェント・ホールと言っていますが、その完成後の初の催し物、つまりこけら落としの場ということになります。今日の椅子のセッティングは映画会のセッティングです。そのために、スクリーンの反射を防ぐためにステージの上に一面黒い布が敷かれています。ステージのフロア自体はスクリーンの奥まで延びています。ですから、

椅子を舞台の奥に、今私に向いている向きにぐるっと囲むような形で並べて、お客様に囲まれる形でラウンドテーブルのシンポジウムをするとか、芸能のパフォーマンスのイベントが実施できる、そういう仕組みになっています。

このホールには同時に双方向型のライブ映像配信システムを装備して、多言語対応の同時通訳システムも新たに備えました。みんぱくは、研究者と、ここへ来ていただくお客様、そして研究の対象となってきた現地のコミュニティの方々、という三者の協働の場、ともに働く場、フォーラムの場であるということを標榜していますが、インテリジェント・ホールはフォーラムを物理的に実現する場というふうにも言えます。

イギリスのロンドンから二〇〇〇年代に始まって、今ニューヨークを中心に世界的に広がりを見せている演劇の形態にイマーシブ・シアター (immersive theater) というものがあります。イマーシブ、浸透する劇場。つまり、演者に対して観客が対面して鑑賞するというこれまでのステージ上の公演形態から、演者と観者が同じ空間に入って、観者が作品の一部として参加する形態の演劇を言うものですが、みんぱくのインテリジェント・ホールはまさに、日本にはまだなかなか例を見ない、イマーシブ・シアターにうってつけのホールと言えます。

コロナ禍のなか、こけら落としの催しを今日このようにして、3・11以降私たちと深いつながりをもってきた波伝谷を舞台にした映画と、それに関する座談の機会を開催できるということをし、率直に申し上げて、私、大変うれしく思っております。今日は最後までどうかごゆっくりとおつき合ってください。本日はお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。

## 解説

日高 真吾（国立民族学博物館）

日高 皆さん、こんにちは。国立民族学博物館の日高真吾と申します。今日はみんなよく映画会にお越しいただきまして、まことにありがとうございます。今回の映画会の企画は、特別展示場で今開催しております特別展「復興を支える地域の文化―3・11から10年」の関連企画ということでご案内させていただいております。映画の解説については後ほど監督の我妻さんからご案内させていただきますが、私からは、この特別展をどのような思いでつくったのかを簡単にご紹介したいと思います。

「3・11から10年」というサブタイトルがついていますように、この特別展は、二〇一一年の東日本大震災を大テーマとしています。先ほど館長からご案内いただきましたように、私は二〇一一年三月の震災後、被災地で行われた文化財レスキュー、つまり、被災した文化財を保全するための活動に、二〇一一年五月のちようど連休明けから参加することになりました。石巻市に最初



に行きまして、当時、宮城県の教育委員会に在籍されていました小谷竜介さんと、どのように活動を展開するかを議論しながら活動を進め、この十年を過ごしてきたということになります。

当然ながら、文化財レスキューを十年間、毎日やってきたわけではありません。文化財レスキューについては簡単に紹介します。文化財レスキューとは、被災現場から資料を取り出して、鍵のかかる安全な場所に一時保管をして、一時保管中の劣化の進行を抑制するための応急処置を施す。こうした一連の活動を文化財レスキューと言います。この文化財レスキューは東日本大震災では二年間かけて行われました。ただし、その後、文化財レスキューしたものを最終的に地域にお戻しする際、どのようにしてお返しするのが問題であり、こうした課題に取り組んできたのが、その後の八年間、つまり、この十年間ということになります。

そうした十年間の活動を凝縮したのが今回の特別展です。この特別展には「地域文化」というキーワードを入れました。地域文化といえますと、地域にある文化と言えばそれまでですが、もう少し細かく言いますと、我々の日常の生活のなかで生み出されてきたさまざまな文化的な要素ですね。文化的な要素というのは、歴史とか、お祭りとか、言葉とか、そういったものが総体をなして生み出されていくものですが、そうしたものを地域にお戻ししていくために、レスキューしたものをどのように地域で活用しながら、継承してもらおうかを考えてきたというのがこの十年間であり、今回の特別展ではそうした活動の様子をお伝えしています。

なかなか難しい内容、メッセージを込めた特別展です。つまり一つ一つのコーナーから皆さんがいるいろと自分たちの日常について振り返ってください、考えてくださいという展示になって

おります。また改めて後ほど、あるいは日を改めて見ていただきまして、自分たちの日常のかけがえのない生活のすばらしさとか、そういったものがある日突然、災害で失われそうになったとき、どういう思いになるのか、そうしたことをイメージしていただけると、二〇一一年の被災地の人たちの気持ちというものもわかってくるのではないかと思います。

それと、もう一つ、このコロナ禍です。我々の日常、どうでしょう。前の生活スタイルではない、いろいろなことを我慢しなければいけない、楽しみもどんどん制限されていく、そういうような状況下にあるなかで、次、じゃあ私たちは何を目指して、いわゆる新しい生活様式というものを取り入れながら、新しい生活スタイルをつくっていくのか、そのときに何を考えるのかということについても、今回の展示はヒントになるのではないかと思います。

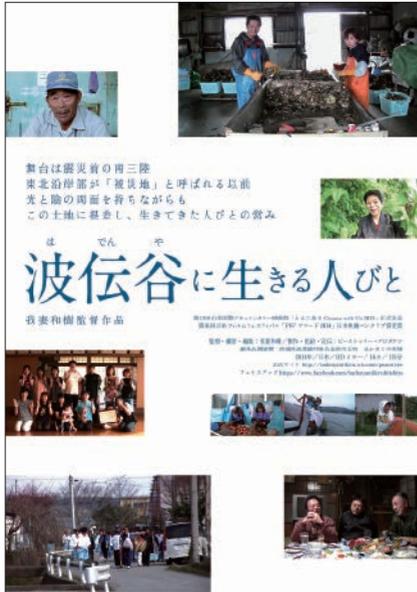
つまり、被災地に赴いて、私たちは地域の皆さんと何を考えていたのかというと、かつての日常の暮らしを少しでも取り返ししながら、新しい環境のなかで豊かな日常を取り戻していく、そのためのお手伝いをしてきた活動ということでもありますので、これはまさに今のコロナ禍の私たちの暮らしにおいても、参考にさせていただける部分があるのではないかと思います。

さて、今日は「願いと揺らぎ」という映画を紹介いたします。宮城県の南三陸町波伝谷というところでの物語となっております。私自身、実はこの映画の舞台になっていきます波伝谷については、二〇一一年の秋ぐらいに一度ご挨拶に行っております。今日の映画は、春祈禱というお祭りが中心にあるわけですが、そこでの主役は、獅子舞です。私が波伝谷に赴いたのは、まさにその獅子舞で使われる獅子頭が地震で壊れてしまったので、その修復のお手伝いをするので伺った

というつながりがあります。

そうした活動の流れのなかで、今回の作品の監督である我妻和樹さんとも知り合いました。そして、二〇一六年二月に、波伝谷を舞台とした第二作目の作品「波伝谷に生きる人びと」の上映会をしました。この映画は震災前の波伝谷の暮らしというものをベースにつくられた映画ですが、震災後、波伝谷でどういうふうに興じているのか、まさにそこで生きようとしている人たちの葛藤、思い、そういったものが凝縮された映画です。こちらの映画もご関心があれば、ご覧いただきたいと思います。

以上、私から、簡単ではございますが、ご挨拶を兼ねて特別展のご案内をさせていただきます。それでは皆さま



波伝谷に生きる人々のポスター



民博で修復した獅子頭

んお楽しみください。どうもありがとうございました。

すみません。私の話が長過ぎたので、我妻監督の話をしていると映画が終わらないということが今アナウンスされましたので、我妻監督とはまた後ほどディスカッションをします。そのときに詳細を語っていただきますので、どうぞご了承ください。それではよろしく願います。

## コメントとデイスカッション

司会 日高 真吾（国立民族学博物館）

解説 我妻 和樹（映画作家）

小谷 竜介（国立文化財機構文化財防災センター）

日高 改めてみんなの日高です。映画、いかがでしたでしょうか。人が生きていくなかで、危機的な状況になったとき、何を考え、どういう行動をとるのかということ、そういう内面的なところをとっても丁寧な作品としてまとめられていた映画かと思います。よろしければもう一度、我妻監督に拍手をいただければと思います。

これからデイスカッションに入っていくと思うんですが、本当は冒頭で皆さんにご挨拶する予定だったのが、ちょっと手違いがありました、この場で初めて皆様とお会いすることになりましたので、我妻監督から一言お言葉をいただきたいと思います。よろしくお願いします。



**我妻** まずは皆様、「願いと揺らぎ」、最後までご鑑賞くださいましてありがとうございます。本当は冒頭で一言ご挨拶させていたかったです。11から10年ですが、今回の特別展「復興を支える地域の文化―3・11から10年―」の開催、まことにおめでとうございます。また、このコロナ禍で大変ななか、今回のみんぱく映画会を開催していただきましてまことにありがとうございます。じゃあ、これからお話しさせていただきます。

**日高** 我妻さん自身が南三陸町に入られるというのは、実は大学時代に民俗学を勉強していて、調査実習で波伝谷に入ったことがきっかけと伺いました。そういったところで、幾つか、あまり聞きなれなかった言葉とありますが、例えば菅原幹生さんのお宅の家号がシバ、スバと書かれていますよね。

**我妻** なまつてスバというふうな。

**日高** そうです、そのほか、契約講の解説が入るなど、そういう民俗学的なところでのフォローをしてみたいと思います。スペシャルゲストを一人用意しております。ご登壇いただきたいです。小谷さん、よろしく願います。

我妻さんには小谷さんが加わることは今まで全然言っておりませんでした。最初に言うところ、ごいプレッシャーを感じるかもしれないと思って今まで伏せていました。小谷さんは、現在は国立文化財機構の文化財防災センターに所属されていますが、先ほど私、冒頭の挨拶で、東日本大



震災の支援活動のなかで東北歴史博物館の小谷さんと一緒に活動してきたということを申し上げました。この方が、その小谷さんです。拍手でお迎えできればと思います。ありがとうございます。それは小谷さん、自己紹介をお願いします。

**小谷** 小谷でございます。秘密で来いと言われたので私もすごいプレッシャーを感じていたのですが、今ご紹介いただいたとおり、三月までは宮城県におりまして、博物館だったり文化財の仕事させてもらったりしていました。国立文化財機構文化防災センターが昨年の十月に奈良にできまして、今はそちらで働いております。我妻君とは今あったとおりで、最初にあったのは二〇〇四年だよ。二〇〇五年だっけ。

**我妻** 経緯をお話ししないとあれだと思わんですが、僕は仙台の東北学院大学に通っていたんですが、そこでたまたま、県内の漁村の地域の暮らしを民俗学ゼミで調査して、最終的に本にまとめるというふうなプロジェクトが立ち上がって、それが、民俗学ゼミと、小谷さんが当時勤めていらした東北歴史博物館の共同のプロジェクトということで始まりまして、多分下見にはいろいろ行っていたと思うんですが、最初の調査が波伝谷のお獅子さま（おすすさま）だったんですよ。それが二〇〇五年の三月十二日とかそのくらいだったと思うんですよ。

**小谷** ということで、私も波伝谷とは十六年ぐらい関わっているといっても、ここ何年かあまり行く機会はなくなっていたんですが、そういう意味では我妻君がずっと通ってくれているので、



いろいろな状況もわかるし、ありがたいことだと思っています。

**日高** 今のお話でおわかりかと思いますが、波伝谷の人たちが我妻さんに対して、とても心を開いて、カメラを通していろいろな思いをお話します。さっきも話していましたが、出演者の皆さんがもはや俳優さんみたいでしたよね。ただ、あの方々の言葉は台本を通した言葉でも何でもなくて、まさに今その場で感じている生の言葉です。それがより一層強いメッセージとなって私たちに伝わってきます。

このようなメッセージを引き出せたというのは、やはり我妻さんがずっとあの地でカメラを回し続け、皆様とコミュニケーションをとり、さまざまな信頼関係を築いてきたからこそ、ドキュメンタリー映画になっていきますし、ドキュメンタリー映画は、そういう信頼関係の一つの成果というものが成功の可否を左右するだろうと思います。

我妻さんに質問したいんですが、この映画はドキュメンタリー映画なんですが、民俗学的にあの地域を見ていくときに重要なキーワードは、先ほど言ったシバ、スバという家号とか、契約講とか、当時の震災からの復興のために必要なこととして行政主導で進められた「がんばる漁業」とか、そういったところのエッセンスは今回の映画の根底にとっても強いものとして扱われていますが、それは民俗学を勉強してきた我妻さんの背景が影響しているということなのでしょうか。

**我妻** それは民俗学を勉強してきたからという。  
**日高** はい。

**我妻** そうですね。ただ、僕自身、民俗学を学んだとはいっても、学問的にはほんとかじった

程度くらいで、むしろもともと僕は小学校五年生のころから将来映画をつくりたいという夢を持っていて、この世界を見詰めていくための視点というものを……。結局知らないことには想像できないというのがあるので、どうやったらそういう視点を養っていけるんだろうというもののなかに民俗学というものに興味を持って、そこがきっかけで波伝谷の調査に関わることになったというのがあるんです。

だから、もともと本来、調査メンバーのなかにはいけない人間と言ったらあれですが、調査に関わる動機がほかの人とは違ったというのがあった。ただ、調査自体は一生懸命がんばってそこから多くのことを学んだつもりなので、僕が民俗学という学問を学んだからああいうところに目が行ったというよりは、単純に調査そのものの経験が大きかったのだと思います。そうして震災前から既に六年間という時間をかけて地域に入っていくなかで、その地域の暮らしの文脈とか、今そこに生きている人たちが何を思いながらそこで生きているのかという、そういった人間的な面に触れていく機会をたくさん得ることができた。だから、この状況を追いかけていくためには、誰を通して、どこをどう見ていったらいいのかというのは、割と自分の肌感覚でそういうのを探っていったというふうな感じになります。

**日高** なるほど。あまり、民俗学的な学びの要素は意識されていないということですね。それでは、小谷さんには少し民俗学的なところで補足していただきたいのですが、「契約講」、「がんばる漁業」というのは、我々の住んでいるところではあまり聞きなれない言葉です。このことについて、ちょっと教えていただければと思います。

**小谷** 説明は難しいところもありますが。「契約」という言葉、新しい、最近よく使う言葉のようないメージだと思えますが、宮城県を初め、東北の旧仙台藩領と呼んでいる宮城県と岩手県の一部のあたりにとても多く使われております。集落のいわゆる村組織と呼ばれているもの、集落の集まりというのを「契約」という表現をするんですね。講というのはそういうグループ、仲間みたいな意味です。

江戸時代ぐらいからもう「契約」という単語は使われているので、昔から使われてきた単語です。何を契約しているのかというと、村づき合いの中身を契約をしているんですね。なので、村に住んでいるから当然のものとして仲間に入るのではなく、村の人たちと契約を結んで、どういう協働作業をするのか、お手伝いをするか、そういうことを決めて、それによって集落というものができているということになります。ある意味ドライな関係というか、何のときはどうするという約束を必ず確認していくというのをやっているのがこの地域の集落のあり方になります。

映画のなかで、特に前半部分のところ盛り上がっていた、契約講長になる、高台移転云々という話が重要なのは、契約講はあくまでも、集落に住むから契約講員になれるわけではなくて、契約を結ばなければいけない。ということ、実は波伝谷のなかには契約講に入っていない人というのが半分ぐらいいたんですね。それは単語で出ていたのは一カ所かな、親興会と波伝谷会という会があって、そこに入っている人たちがいる。

何が言いたいかというと、震災の前までは、集落の代表というのは契約講長であるという言い方をずっとされてきて、それが普通のものとしてきたんだけど、実は契約講長というのは波

伝谷の半分の人の代表でしかない。残り半分の人たちを代表していないんだけど、何となく代表っぽいことをやっていたので、波伝谷というのは社会全体が契約講というグループででき上がっているように見える、というのがあそこにあった前提なんです。

高台移転という契約講に入っていない人の利益を含めて、講長は果たしてそんなことを担えるのかというのが、最初、当時の講長だった三浦俊喜さんがずっと悩んでいたところなんです。

親興会とか波伝谷会は昭和に入ってきた組織なので比較的新しいので、それができる前だったり、できた直後ぐらいいも、一言で言うとうと分家の人たちのグループになるんですが、そういう人たちは本家である契約講の言うことを聞くもんだよねというのが普通だったんですね。ところが、震災の後という状況のなかで、果たしてそんなことを僕たちがやってもいいんだろうか、親興会と波伝谷会の人たちはそれで納得するだるうか、というところがあのあたりの悩みだったというところになるわけです。

その辺をどこまで突っ込むのかというのは、わかって見ていると俊喜さんの悩みはすごくよくわかるんだけど、見ていない人にとここまで伝わったのかなというのは、私も見ながらちょっと思ってい



三浦俊喜さん



契約講の総会の様子

たところでは。

次に「がんばる漁業」は震災後の話になりますので、これは純粹な制度の問題になります。農林水産省の被災地支援の補助金として作られた制度になります。被災地の支援というのは、被災した人にお金をあげて、漁業を再興してくださいと言えればいいような気がするんですけども、役所の考え方として、個人補償はしない、というのが前提になってくるんですね。そうではなくて、グループに対して助成をしますという言い方になってくる。そういうことでしか役所はお金を出すことができないという論理のなかで、被災した漁師たちへの助成制度としてつくり出されたのが「がんばる漁業」「がんばる養殖」です。

また、この制度は養殖と一般的な船に乗る漁業とは分けてつくっていた。制度的なのか、お金の問題なのかわかりませんが、波伝谷の人たちは「がんばる養殖」に入ることになりました。「がんばる養殖」というのは、その地域の漁業者が全員で集まって一つの補助金を受ける会社組織のようなものをつくって、そこに養殖の資材をまとめて購入するお金を一〇〇%補助でもらうという制度になります。なので、「がんばる養殖」のグループとして補助金をもらっているの、みんなで仕事をして、給料のように売上を分配してもらうことになるので、サラリーマ



「がんばる漁業」の1シーン

ンみたいになった。そして誰かから指示を受けて仕事しなければならない、ということになり、みんなが悩んでいたという話になります。

この制度のミソは、まさに三年間だけの時限的なもので、それは途中で説明が入っていたとおりです。三年間やったら、その資本をもとに後はみんなでこれまでもどおりできるんだという。その三年間が我慢できないというところがミソということになります。それに対して、彼らの、それぞれのいろいろな微妙な葛藤だったり、三年間我慢すればいいんじゃないの、何で我慢できないのみたいな口ぶりで話している人もいたりということで、その辺はある程度映画を通して伝わったのではないかなと思います。

**日高** ありがとうございます。作品のなかにあつた波伝谷という地区の集落の背景とか、「がんばる養殖」という一つのキーワードにもなっていた、波伝谷の当時の生業を代表することの背景が少し見えてきたのではないかと思います。

ここで、大きく話題を変えますね。ざっくりとした質問ですが、我妻さん、監督として改めてこの作品を見てどうでしたか。

**我妻** 多分二年以上ぶりくらいに久しぶりに見ました。あのときは無理して撮っていてよかったです。この作品を見てどうでしたか。

コロナ後の今みると、ああいうすごく密接した距離感のなかで、お酒を飲みながらにしても、人と人が顔を合わせて思いを伝え合っていて、必ずしも思いがちゃんと届いているかというところなんです。同じ時間と空間のなかで人が一緒に過ごしているというのがすごく大事なことに思

えます。例えば男の人たちが厄年のお祝いで集まっているところで、町外に瓦れき撤去の解体の仕事に行つて海から離れてしまった、僕より一個下の青年がいるんですが、何かあつたら俺のところへ来ていいんだからとか、頼つていいんだからとか、ああいう話も今みると誰にも当てはまるような話というか。

本来の意図は、震災に関係なく、最初は一つの地域社会の変遷みたいなのを意識して撮り始めたのが、結果的に、震災を経て土地に生きるとか、人と人がともに生きるということはこういうことなんだろうというのを描いた作品なんです。このコロナを経て、その意味合いがもっと鮮明になってきたと言つたらあれですが、今日久しぶりに見て、ところどころ自分でもこみ上げてくるところがありました。

**日高** ある意味、そういう機会を我妻さんに提供できてよかったです。

**我妻** 自分の話になつちゃうのであれなんですけど。

**日高** そうですよ。私も震災から十年間、私ができる限りの関わり方ということで、東北といろいろなご縁を結ばせていただきましたが、何を大事にしなければいけ



厄年のお祝いのシーン

ないのかなということを考えたときに、人と人が頼り合えるとか、信用し合えるとか。その人たちがいることによって若干うっとうしいときももちろんあるんだけど、いざというときには頼りにできるとか、そうしたことを考えていました。そして、そのような暮らしの情景が、復興していくなかで再構築されたり、あるいは再生されたり、そうした環境ができるお手伝いがしたいと思っていました。

当然、私は文化財の保存、あるいは保存修復という、保存科学という学問が専門なので、被災した地域の文化財の修復などの活動を通して、先ほど申し上げたような暮らしの情景をどのようにつくっていくのかを考えながら、東北の人たちと過ごした十年間だったんだなど、映画を見ながら思いだしていたところですよ。

そのときに、我妻さんも、何の因果か、獅子舞を再開するに当たって支援活動に参加されていききましたね。ただし、一方では自分たちで頑張るという立場、考え方があって、つまり、相反する立場、考え方だと思っています。そのはざまのなかでご自身も揺れながら、支援活動に参加され、その結果、反省というか、落ち込む場面が描かれていました。あの場面は、映画のタイトルが「願いと揺らぎ」なんですけど、このタイトルは、我妻さんにとっての「願いと揺らぎ」の側面もあるのかと思いついて見ました。そうした揺らいだ気持ちのなかで、参加された、いわゆる支援活動とはどういうことなのかということについて、当時のことを思い出しながら考えてみると、こういうことが言えますでしょうか。

**我妻** ちょっと難しいんですが、この映画ですと基調になっている幹生さんという方が重要な

存在として登場しますが、幹生さん自身も決して支援が絶対嫌だと言っているわけではないんですよ。それをどういう選択をするにしても、自分たちの気持ちというものを確かめたいという、当事者たちが本当はみんなどういこうを思っているんだろうとか、多分そういうものを確認したかったんじゃないかと僕は思っています。

震災の一年後って、いろいろなところで地域のなかで大切にされてきた伝統行事とかが復活しているじゃないですか。それは新聞とかテレビとかいろいろなメディアでも報道されたと思うんですが、僕自身も、獅子舞を復活させたいという話が波伝谷から聞こえてきたときに、自分のなかで震災前と震災後の今がっながったような感覚があったんですね。

正直、お祭りとか伝統行事と違って、インフラとかいろいろなものが整って、最後でいいんじゃないかというふうに思ってしまうところもあるんですが、なぜあえて、まだ被災した瓦れきの山とかも全然片づけられていないあの状況で、何でまずそれをやろうとしたのか。

そこには、自分たちがここで生きていくということを決めるというか、そういった本人たちの意志がないと、これからいろいろな国の政策だったり、どこにどう向かっていくかわからないなかで、いろいろなものに翻弄されながら、いろいろなこと



菅原幹生さん

が曖昧なまま進んでいってしまおうというなかでの、本当は何を取り戻したいのかとか、そういうのもわからなくなってしまうていくことの怖さというのが恐らくあったと思うんです。

そのためにも、この伝統行事というものをどうしても復活させて、ここで生きていくんだという思いを地域の人たちのなかで確認したかったという気持ちもあるんじゃないかと思っています。

ただ、そこで支援というふうになるときに、外部から入った多くの人が被災してからの地域のことしか知らないと思うので、当事者の繊細な気持ちとか、本当は何を求めているのかということはなかなか分かりづらいと思うんですね。ただ支援すればいいという話ではない。震災前の暮らしはどうだったのかとか、恐らく震災前との関わりがないなかで、震災をきっかけに外からやってきた人が多いなかで、それはそれで、外から来た人にはその人なりのいろいろな葛藤とか、どういうふうにごの方々と関わっていけばいいんだろうという葛藤もあったと思うんです。

現地で生きている人たちも、例えば今回の春祈祷に対しても、支援を受けるのか受けないのかというなかで、いろいろな複雑なものもありながら、でも一つ一つ納得して、もちろん納得がないまま進んでいってしまったものもあると思うんですが、そうして当事者が自分の意志で選択するというのが大事なかなと思っています。ちょっと話が上手くまとめられませんが。

**日高** 私は今回の震災に関しては支援にいく側という立場でしたが、これは一体何のためなのか、何でやっているのか、本当にこれで合っているのかということはずっと考えながら活動を進めてきました。

小谷さんも答えは持ち合わせていないのかもしれませんが、小谷さんは十年間、被災地の文化

に関する、あるいは博物館に関することで支援を受ける、あるいは支援を届けるということもされてきました。その視点から、支援ということについて、どのような思いを持っておられますか。

**小谷** 私自身は三陸沿岸、福島から岩手までフィールドにしてこの二十年ぐらい取り組んできて、二十年のうちの前半十年が普通に調査をしていて、残りのこの十年は震災の復興関係ということ、二十年とはいっても単純ではないんですが、そのなかで一番長く入ったのは波伝谷なんですね。

波伝谷のことを報告書にまとめるときに、先ほどの契約講をどのように書くかという話をして、契約講長は集落の全ての代表ではないという話になったわけですね。我々の調査の経験においては、集落へ調査に入るときというのは、集落の代表になる人、多くの場合、区長さんと言われるような方だったりするんですが、波伝谷の場合はそれが契約講長だったわけですね。でも、先ほど述べたように、必ずしもそれは正確ではない。

じゃあ、波伝谷の人が、俺たちみんな波伝谷の仲間だよねと認識するのってどこなんだろうか。集落が全員集まる場ってあるんだろうか、と見ていくと、何もなし。お獅子さまも契約講の行事だったの、獅子舞をやっているのは契約講の人だけだったんです。ただ、あれは魔よけの行事で、波伝谷にやってくる悪いものを全部出さなければいけないので、契約講の人がやっているんですが、契約講以外の人の家も悪いものを取り除かないと波伝谷全体がきれいにならないということ、契約講員であろうとなかろうと、全部の家を獅子舞が回っていたんです。ということは、波伝谷において、春祈禱の獅子がやってくる家が波伝谷の家。実はそれしかないんじゃないかというのが私なりの結論だったんです。

何が言いたいかというと、お獅子さまをやることこそが波伝谷だということがわかる、波伝谷という形が唯一、つくられる。お獅子さまがやってくる家だけが波伝谷の家であるという、その論理になるんじゃないかというのがあった。

だからこそ獅子舞を取り戻さなければいけないんだという、その論理になってくると思うんです。獅子舞をやらないと、僕は波伝谷の人間ですと名乗る機会がない、確認する機会がなくなるという。獅子舞が来るといふのはどういうことかという、家で獅子舞を舞ってもらっただけではなくて、獅子舞に來た人たちにお振る舞いをする。振る舞うことによって獅子舞と関わる。映画にもできた女性たちのお獅子さまに対する熱い思いというのはそこから来ているんだと思うんです。来た獅子舞衆の若者たちに何かお振る舞いをしないと獅子舞として完結しないということですね。

だけでも今言ったのは、これは民俗学者の分析の結果でしかないわけですね。地域の人はそんなことを思いながら暮らしているわけではないので。そうするとああいう葛藤みたいな話にきつ



再開した波伝谷の春祈禱

となつてくるんだらうな、というようにまとめると、とてもいい民族誌映画としても解釈をすることができると思っています。

そこから引つ張つてということ、支援つて何なんだらうかということ、その結論をもうちょっと広く三陸に広げていくと、三陸全体でも意外とこれに近い感じのことが言えるんじゃないだろうか。芸能はその集落というものを一番はつきりあらわす。波伝谷と同じ系統の獅子舞があの地域だけで百は下らないんです。岩手県・宮城県全域でいうと数百という獅子舞が同じような形態の行事をやっているというところになります。そのなかで集落のあり方にかなり大きな影響を与えているんじゃないかという印象をもちます。そこから来る結論としては、地域のコミュニティを維持するためには、芸能の支援というのはまさに揺るがずにやっていかなければいけないことなんだらうなというふうに考えています。

日本中どこでも芸能がそうかという決してそうではないわけですが、地域地域にある地域社会をかたどる装置みたいなものをつかんでいく、そこに支援をしていくというのが私たちは片方で大きなところになるのではないかと考えていますし、今のお仕事につながってきます。獅子舞もそうですが、文化財的なものはそういう装置のなかの一つ。組織としての装置は契約講を復活させればいいのかもされないし、契約講にかわる組織をつくれればいいのかもされないけども、地域ごとのものは地域をかたどる文化であり、私の仕事からすると文化財ということになるというのが私なりの思いということになります。

**日高** 人というのは、皆さん一人一人をわけて、そうしたなか、一人一人が、自分は一体何なん

だろうとまず感じることは、とても大事なことなのかなと思います。特に災害で、当たり前になつた生活がなくなつてしまふときに、自分って一体何なんだろうと、きつとそこで人は問い直すんだらうと思います。

そのときに問い直せるものが、今回のこの映画に引きつけて言うとお獅子さんがやってくるということだっただらうし、地域として私たちの集落はこういう集落だというものをきちつと感じ取れるのが、春祈禱という行事だったのかということなのだらうと思います。そうしたことをこの映画は語ってくれたと思います。

だからこそ支援を受けて再開すべきなのか。やっぱり自分たちの力で取り戻していくのか。春祈禱をやるという結果は同じです。そこに至るプロセスについて、支援、自力のどちらを選択するのかというところで、あれほどの考え方の違いがあつた。でもみんなと一緒に暮らしていくのかにおいて、どのようにすり合わせていくのか、どのように折り合いをつけていくのかということが、この映画のなかではとても丹念に描かれていたのではないかと思います。

そういう意味では、私たちは文化的なことの仕事に関わっています。今、小谷さんにおっしゃっていただきましたが、そういう視点を持った支援のあり方ということ、これからの私たちの仕事にとって、研究活動とともに重要な要素になってくるのかなと思います。

実は我妻さんはこうしたテーマに正面から取り組むような新作をつくられております。さつき「続く」と書いていましたが、その続きなんだと思うんですが。

**我妻** いや、その続きではないです。

**日高** ではないんですね。あれはあれで続くんですね。それでは、訂正します。新作の映画「千古里の空とマドレーヌ」が発表されますね。

**我妻** そうですね。今画面に映っていますが、波伝谷のなかで一軒だけ残ったペンションが出てきたのを覚えていらっしゃるかわかりませんが、お母さんたちが集まって会話をしていたシーンで、僕は震災前からそのペンションに泊まって波伝谷の撮影をしていたんですよ。ご家族のようなおつき合いをしていたペンションでお菓子をつくるお父さんがいて、僕からすると親友のような——向こうがどう思っているかわかりませんが——そのような方がいて、その方が被災したなかで、それでもお菓子づくりを再開したいというところで、そこにつながるボランティアさんたちとの交流だったり、さつき支援という話が出てきましたが、お互いの支援と被災支援をめぐる関係性のいろいろな複雑さというものを描いた作品です。

被災地の方々とか被災した方というと、必ずしもそれが助けを望んでいるとか支えられてばかりの人ということも決してなくて、波伝谷の人たちもそもそもみんなすごく強いし自立してい



千古里の空とマドレーヌのポスター

る。自立というのは、波伝谷の人たちの間でちゃんと関係性を結びながら自立した生活ができて  
いる。だから、僕自身も自分が何か役に立つような支援ができたかという、別に何かができた  
わけでもないと思っています。

それで、本作は「願いと揺らぎ」と同時に撮影していた映画なんです。でも、「願いと揺らぎ」はも  
ともとそこに住んでいた人たちの復興に向けた映画であるんですが、こちらはそこに住んでいた  
人と外から入ってきた人たちのどのような関わり合いが町の復興を支えてきたのかというもの  
を描いた映画で、二つ見比べてみると全然違った見え方がしてくると思います。

ラストでは震災から十年を迎えた今が描かれるんですが、あの当時、葛藤しながらもともに前  
に進もうとした関係性がどういふふうな花を咲かせたのかということ、東北に足を運んだ全国  
のボランティアさんとか、現地には行けなくても遠くから思いを寄せたたくさんの方の思いが報  
われるような作品になるといいなということをつくった映画です。

この上映会の文脈のなかで紹介するのも全然話が変わってくるんですが、最新作ということで、  
こういう映画がありますというご案内だけさせていたただきたいと思っています。

**日高** この作品、私もでき上がったときに見てくださいというところで、拝見させていただきまし  
た。支援をされるということはどういうことなんだ、どういう形で応えたいんだという人の思い、  
支援をするということはどういうことなんだ、どうしていきたくんだという支援する側の人の思い  
をととても丁寧に描いている作品になっており、今の支援を受けること、支援をすることと言う話  
題にもつながっていく作品かと思えます。これからいろいろな場での上映会とかなされていくこと

もありますし、機会があればみんなくにおいても紹介できたらと思っております。そのときには我妻さんに来てもらい解説をいただこうと思いますので、またよろしく願います。

**我妻** ありがとうございます。

**日高** そろそろ時間も来たんですが、最後に一言お願いできますでしょうか。

**我妻** あと前作のご案内も。

**日高** そうですね。どうぞ。

**我妻** 今回の映画は波伝谷の映画の二作目に当たりました、震災が起こるまでの三年間の日常を追った「波伝谷に生きる人びと」という映画があります。これは過去にもみんなく映画会で上映していたいたんです。

**日高** 二〇一六年二月に上映しました。

**我妻** 順番的にはこつちが先なんですが、「願いと揺らぎ」を見てから「波伝谷に生きる人びと」をみると、こういう暮らしが沿岸部にあったんだということと、東北の一漁村の話ではあるんですけども、もつと普遍的な、変わりゆく農村漁村の文化とか、そこで生きている人たちの営みとか、そういったものが見えてくると思います。今、ミュージアムショップでDVDとかそういうものも販売していますので、よければ見ていただければと思います。

今回の「願いと揺らぎ」の上映会を仙台で行ったときに、出演者の方々とトークをしたということがあったんですが、俊喜さんと幹生さんと当時の契約講長さんと、もう一人、三浦秀子さんという出演者の女性を招いてトークをしたときのテキストにしたものが「願いと揺らぎ」のパン

フレットに掲載されていますので、そちらも読んでいただけると、当時こういうふうな気持ちで過ごされていたんだとか、幹生さんとかいろいろな人の思いもわかるかと思えます。よろしければそちらもショップで手にとっていただければと思います。

**日高** ありがとうございます。そろそろ時間もきておりますので終わりに近づきつつあるんですが、本日皆様に持ち帰っていただきたいというのは、人と人が生きていく社会ってどういうことなんだろうということ、いま一度振り返っていただけたらと思います。このコロナ禍、なかなかコミュニケーションがとりにくくなっています。そうしたところをどう取り戻すのか、そうした視点についても、またみんな考えていければと思います。みんなもこれから頑張っていくのでよろしくお願いします。本日はどうもありがとうございます。

それではショップなど寄っていただいて、今回は我妻監督のサイン入りのDVDなどが売っておりますのでお買い求めいただけたらと思います。

**我妻** コロナ対策のため事前にサインをしておきましたので、よろしくお願いします。

**日高** よろしくお願いします。ありがとうございます。

## 映画会 明日に向かって曳け

### ——石川県輪島市皆月山王祭の現在

二〇二二年四月二四日開催

## 館長挨拶

吉田 憲司（国立民族学博物館）

吉田 皆さん、こんにちは。緊急事態宣言の発出を明日に控え、私どもみんなも明日から当面の間臨時休館ということになりました。そのようななか、こうして私どもの映画会にお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。

この映画会は現在みんなばくで開催をしております特別展「復興を支える地域の文化―3・11から10年」の関連企画として催すものです。3・11、東北地方の太平洋岸を巨大津波が襲った東日本大震災

からちようど十年がたちました。あの日私は、その前夜から宮古に泊まっていて、津波の日の朝、宮古を出て北の久慈へ移って、久慈で地震に遭いました。そのまま盛岡へ出て、盛岡でしばらく



避難をしております。

その後大阪へ戻ってきまして、被災地から離れたこの大阪にいる自分、あるいはその自分が所属している博物館がこの未曾有の大惨事に対してどのように関わっていいのか、何ができるのかというのを自問してまいりました。大阪へ戻ってすぐに大規模災害復興支援委員会というのを立ち上げて、復興の支援に取りかかりました。保存科学が専門で、その復興支援の活動の中心になって、とくに文化財レスキューに当たってくれたのが、今回の特別展の実行委員長、そして今日のこの映画会を企画してくれました日高真吾教授です。

震災の直後、地域コミュニティそのものの存続が危ぶまれるような状態のなかで、芸能どころではない、お祭りどころではない、そういう声を現地でも聞きました。ですが、実際には被災地ではその年、例年以上に祭りや芸能の奉納が活発におこなわれました。それは、人間の生、生きていること、人間の存在、そしてコミュニティの存続にとつての有形無形の文化遺産の重要性の価値を改めて認識させられる出来事でした。震災からの復興に当たっても、地域の祭り、芸能というのは人びとの結束のよすがとなり、また新たな地域コミュニティを立ち上げていく上での原動力の役割を果たしたように思います。

今日の映画は東方地方を対象としたものではありませんが、今回の特別展の実行委員でもある国立歴史民俗博物館の川村清志さんが長年関わってこられた石川県輪島市皆月の山王祭に関わる青年会に焦点を当てて、過疎化のなかで存続の危機に瀕する祭りの現在を映像化したものです。

ハリウッド映画の傑作「明日に向かって撃て」をほうふつとさせるような刺激的なタイトルの

ついた映像作品ですけれども、川村さんは、文化人類学、日本民俗学の立場から、日本の祭礼あるいは民俗芸能を中心にフィールドワークに基づく研究を続けてこられました。同時に、その研究の一環として、ドキュメンタリー映像の制作も手がけてこられました。今日上映される「明日に向かって曳け」というのは、その川村さんの渾身の作品です。

既に特別展をご覧いただいた方も多いかと思いますが、今回の特別展では、地域文化が復興を支える力になるという点に焦点を当てています。今日の映画会では、そうした地域文化をどのようにして維持、そして継承していくのか、この現在日本のどこの地域コミュニティも直面している問題を映像を通じて捉え、そして上映の後の川村さん、日高さんのディスカッションのなかで皆さんとともに考えていきたいと思えます。

今日は最後までどうかごゆっくりおつき合ってください。本日はお集まりいただき、本当にありがとうございます。

# 挨拶

日高 真吾（国立民族学博物館）

日高 皆さん、こんにちは。国立民族学博物館の日高です。現在開催しております特別展「復興を支える地域の文化―3・11から10年」の実行委員長を務めております。今回の映画会は、この特別展も関連イベントの一つとして企画させていただきました。映画の解説については後ほど、実際に映画を制作された川村先生からご紹介いただくことにしまして、私からは簡単に特別展の趣旨について、少しご紹介しておきたいと思えます。

この特別展は、先ほど館長からお話がありました。地域文化というものに着目した特別展になります。私自身が、東日本大震災から十年たつ今、この特別展を開催しようということ、実行委員長を務めることになったときに、何を展示しようかを考えた際、東日本大震災のすごく大変だった時期を展示するのか、あるいは現在の東北地方を展示するのかということ、少し悩みました。



そうしたなか、私のなかで行き着いた展示の方針が、この十年間、東北地方がどのように復興に取り組んできたのかについて注目した展示をつくりたいと思いました。この十年間、東方地方の被災地の皆さん、本当に大変な思いをされながらも着実に復興の道を歩んでこられています。そうした方々とこの十年間いろんな形で関わらせていただいているわけですから、何を目指して復興しようとしているのかということ考えたときに、皆さんが思い描く復興という姿が、震災前の暮らしを取り戻すという意識がとても強いと感じました。

じゃあ、その震災前の暮らしというのは一体何なのか考えると、多分、今のコロナ禍で我々が大変な制限を受けて、みんなくも明日から休館せざるをえない状況になっておりますけれども、コロナ以前の生活に戻りたいですね。そうした日々の平穏だった暮らしを取り戻しにいきたいと、今、私たちはそう願っていますし、東北の人たちも、復興するときの目指す目標はもとの暮らしを取り戻すということだったと思います。そこでもとの暮らしを表現するものとして今回の展示では地域文化を取り上げることとしました。

ですから、特別展のほうはあまり美術品的なものは展示していません。しかし、一つ一つの展示物にそれぞれそれに関わった人たちの人生が凝縮されていますし、そういったことの内容を主に紹介しています。図録はそれよりもさらに詳しい解説を記しています。図録もまた手にとって見ていただければと思います。また、本展示では、地域文化をどのように我々、あるいは博物館は見つめながら応援していくのかを考えてきた、そうした内容も盛り込んだ展示になっておりますので、そうした点でも見ていただければと思います。

それでは、本日の主役である川村さんのほうにバトンパスしたいと思います。今日は、石川県輪島市門前町皆月というところのお祭りを映像で紹介します。お祭りというのは、地域にとって、みんなが集まり、自分たちの関係性を感じ取れるとても重要なイベントだと思います。そうしたお祭りに関わる人たちの思いというものをとても丁寧に描き出している映画ですので、お楽しみいただければと思います。

それでは、これで私の挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

## 解説

川村 清志（国立歴史民俗博物館）

川村 皆さん、こんにちは。今日はお挨拶することができてうれしく思います。

本日はこの大変な状況のなか、みんなばくまで足をお運びいただき、「明日に向かって曳け」の上映会にご参加いただきまして、本当にありがとうございます。東京から参ったわけですが、正直、果たして今日来れるのか、開催してもらえるのかとどきどきしながら毎日過ごしていました。この状況ですから、いつ取りやめになっても不思議はありません。実際、明日から民博は全て休館というのを伺いました。もし中止になったら、自費でみんなばくまで来て、「コロナのあほ」と叫んで、それをYouTubeに乗っけてやろうと思っていたんですけれども、幸いにして今日こういう形でご覧いただけることになりました。

まずは、実際に見ていただくにはないんですけれども、背景を少しだけお話ししておきます。先ほど日高先生からもご挨拶いただきましたように、この地域文化をテーマとする展



示に私も関わらせていただきまして、宮城県の七ヶ浜というところの防災紙芝居を紹介したり、あるいは展示のエピソードで紹介されるモバイル展示で、この能登のお祭りを紹介してもいます。能登については、東日本大震災のような災害そのものとは直接関係のない地域のお祭りを紹介しています。ただ、モバイルで紹介しているのですが、能登も能登沖地震という災害が十年少し前にありました。幸いにして亡くなった方はごく少数で済んだんですけれども、地域では多くの家屋が倒壊したり、村にいく道が土砂崩れで塞がって、長らく仮設住宅に住まわれた人たちが結構いました。

今日紹介する皆月に関しては、負傷者も出ず、家もそんなには壊れなかったのですが、墓石の多くが倒れたり、神社の境内の鳥居と灯籠が全部倒れるぐらいの被害があつて、復旧に半年ぐらいかかる、そういう経緯もありました。

ただ、今日テーマとしていくのは、地震のような突発的な大きな災害で共同体や村が危機に瀕するというよりは、慢性的に過疎化、高齢化が起きて、とめどなく若者が村を出ていく、出ていかざるをえない。そして、地域に残るおじいちゃん、おばあちゃんはどんどん高齢化していく。祭りを続けられるかな、もうしんどいんじゃないかという雰囲気も仕方がないというふうになってきているんです。

恐らく今日本の地域社会は、都市圏の一部を除いて、全国津々浦々過疎化や高齢化が進み続いています。実際、多くの祭礼や伝統芸能が休止に追い込まれたり、なくなってしまうたりしている。国指定クラスの民俗文化財ですら危険な状況になりつつあるんです。まして、この皆月の山

王祭は特に無形文化財にも指定はされておられません。ただ、私としては、文化財として指定される要件とは関係なく、地元の人たちにとって祭りというものがどれだけ大事なのか。とりわけ祭りの担い手である青年会員たちにとって、自分たちの祭りを守る、それが自分の村に帰るモチベーションにもなっている。そういう状況下のなかで続けている彼らの営みについてまとめていきたいと思いました。

同時に、この映像は国立歴史民俗博物館の民俗記録映像、研究映像でもあるので、記録という側面も含まれております。だから、祭りの前後についても撮っていて、七章立てのなかで、祭りそのものは五章、六章だけです。それ以外の準備過程であったり、その前日譚というか、年をたがえたときに起きた出来事であったりを紹介していくこととなります。準備過程に携わる青年たちのモチベーションであったり、後片づけを含めて祭りだと考える意識の変革みたいなものを映像のなかから捉えていただければうれしいなと思っております。

ちよっと長いというか、百二分ぐらいございますけれども、最後までご覧いただければ幸いです。本日はよろしくお願ひします。

(上映)

## コメントとディスカッション

司会 日高 真吾 (国立民族学博物館)

解説 川村 清志 (国立歴史民俗博物館)

日高 皆さん、お待たせいたしました。これからディスカッションに入っていきたいと思います。YouTubeの配信は今も同時に進行しているんですけども、二十五分からYouTubeが配信するということなので、それまでこの会場だけで話をしていきます。

川村さんにちょっとお尋ねしたいのが、皆月をフィールドにされたのはいつごろで、どういったきっかけでここをフィールドにしたのかということについて教えていただけますでしょうか。

川村 改めて、ご覧いただきありがとうございます。本当ならそちらのほうをご挨拶のときにお話しすべきだったのかもしれないんですが、あまり先入観というかイメージが固まってしまいうのもよくないかなと思って、さくつと切り上げたんです。この祭りを含めて皆月に調査に入ったのは大学の学部時代です。当時大阪大学におりまして、大学のゼミとして、この皆月を含めた

輪島市、当時は石川県鳳至郡門前町ふせしという自治体があつて、ナレーションであつたかもしれないけれども、門前町のなかの七浦地区しちらに入ったのが大学の三年生、今から三十年ほど前になります。一九九〇年に初めて調査に入りました。

ゼミ全体としてのフィールドワークは三年間で終わったんですけど、私は大学院に入ってから通い続けることになりました。できるだけ夏祭りは参加し続けるようにしました。ある時期から、映像のなかにはゆづぼ先生と出てきた沖沓先生おきなのお家で、祭りの白装束とか、ゲートル、わらじも貸してくれてやらせてもらいました。研究者としては非常にありがたかったです、逃れられなくなったのも確かです。いつの間にか祭りの役員をやらされたり、ずっと準備から手伝っていくという形で現在までの関わりを持っております。

**日高** それでは、ここからディスカッションを本格的に始めたいと思います。YouTubeの皆さんのほうもお願いいたします。改めまして川村清志先生です。すばらしい映画だったと思います。拍手をお願ひできますでしょうか。

ありがとうございます。私も何回かこの映画を見させていた

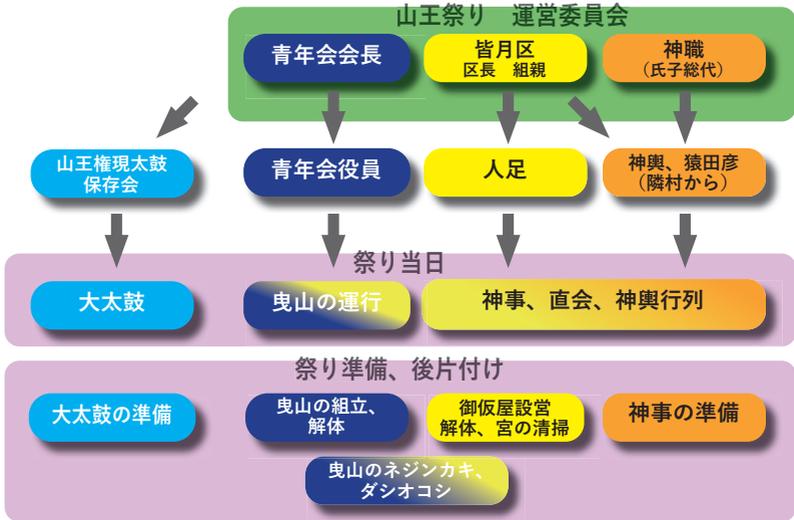


祭りへの参加



大学院生時代のフィールドワーク

## 皆月山王祭りの組織図



だいているんですけど、汗とお酒  
 のにおい満載の、今となっては、あれ  
 くらい人と密になって語り合いたいも  
 のだと思う映画ですね。

最初のほうは、映画のなかで出てき  
 たシーンを振り返りながら、私なりに  
 「うん？」と思ったところの解説をいた  
 だきたいと思います。

お祭りを実際に運営していく組織と  
 して、区長さんがいたり、組親さんが  
 いたり、青年会さんがいたりというこ  
 とはわかったんですけども、そのほ  
 か祭りの主役を担う若い衆の存在が  
 あったり、人足という単語も出てきて  
 ありましたけれども、この集団はどう  
 いう人たちなのでしょう。

**川村** 若い衆と青年会というのは大体  
 イコールというか、地元ではじいちゃ

んなんかが「おい、若い衆」みたいな形で呼んだり、かけ声に使ったりする。自分たちで「若い衆」とは呼ばなくて、同世代は大体「青年会」と言いますが、実態としてはほぼ重なるものです。映像で出てきましたように、中学を卒業して高校生になってから満三十七歳で退会するまで。だけど、最近では、それだけでは人が足りないもので、四十代そこそこでも若い衆になってしまっているような状況です。

人足というのは、村のほうから労働力として、つまり祭りの準備であつたりさまざまな作業に携わったりする方のことを地元でそう呼んでいます。皆月は十の組に分かれていたんですけども、各組ごとに二人ずつ募って、今は計二十人出るようになってる。かつては家ごとに必ず一人出す形で行われていたんですね。だけど、おじいちゃんおばあちゃんの独居世帯もある、あるいは高齢化でちょっと無理という状態なので、全世帯に割り振るのではなくて、組で比較的元氣な人たちが対象となります。

ちなみに、皆月では六十代は若者です。皆月だけではなくて、七浦というくくりで公民館活動なんかがあつて、例えば九月十五日の敬老の日で敬われるのは八十歳からです。六十五歳とか七十代半ばぐらいのおじいちゃんおばあちゃんが、「今日は年寄りのために頑張るぞ」とか言いながらやっているという状況です。

**日高** 映画のなかでも、祭りを存続させるための体制づくりについて、どうしなければいけないのかということをとて熱く語り合うシーンがありました。実際に年齢層の問題とか人口の問題から、お祭り一つを続けていくにしても、大きな組織改革といえますか、仕掛けづくりが必要に

なってきた。そうした背景がこの映画ではよく捉えられていたと思います。

それと、ヤッサーはただ暴れ回っているようにしか見えませんが、あれはどのような意味があるものなんでしょうか。

**川村** 多分、暴れ回りたいんです。いろんな祭りにああいう要素はあると思うんですけども、かなり危ない、危険な状態に自分たちを追い込むことで見せ場を作るわけです。家の二階から撮らせてもらったり、目線の高さに合わせて撮ったりもしているんですけど、実際ヤマに上がると、ヤマ自体が三メートルちょっとあるんですね。プラス自分が一・六、七メートルあるということで、乗っている人間はかなり怖い。

もう一つ言うと、けが人も出る。出てきた主要な人物のなかに前会長の島本君は、現役時代にヤマから落ちまして、顎からダイビングしたので、顎からダイビングしたので、そのまま救急車で運ばれていきました。骨が折れていたので手術までしないとイケない。顎のなかにボルトを入れられて、「川村さん、俺もう一生スルメが食えねえ」と言っただけで済ませましたけれど、そういうことも起きる。だから、祭りの行事としての意味よりも、青年会の盛り上がり为重



ヤッサーの場面

視したものだと思います。

**日高** ただ、彼は映画のなかでスルメはしっかり食べていたので、治ったということですよね。よかったです。

もう一つ、気になったシーンとして、白装束で、ゲートルを巻いてわらじを履く。白というのは要するに清めの白だと思うんですが、このような装束のスタイルになったのはいつごろからですか。

**川村** 正確にはわからないんですけども、多分、近代化してから。そもそも上はカッターシャツですからね。白もトレパンをはいてという形です。実は今展示させてもらっているモバイル展示のなかに、恐らくは戦前の祭りの様子が十六ミリフィルムで映っているんですけども、そのときから既に白装束にはなっている。多分、明治か大正期にはああいうふうな衣装が定まっていたんじゃないかなと思うんですね。

近隣の海沿いの地域は、ヤマの形などが違うところもあるんですけども、大体白装束のところが多いので、恐らく近代化の過程であるの辺り帯そういう形に定まっていたんじゃないか。これまた能登の奥のほうだと全然



白装束の衣装

違うんです。色とりどりの法被、日高先生が行かれて  
いるような穴水もそうだし、珠洲のほうにいくと錦に  
なって祭りのまといになるんですね。地域性みたいな  
ものはあるけれども、近代化の過程でできたんじゃない  
かと思います。

**日高** あと一つ教えていただきたいことがあります。  
神輿の先頭を歩いていた怖い顔の人が誰なのかという  
ことと、もう一つ、神様岩というのがありましたけど  
も、その由来についてちょっと教えていただけますでし  
ょうか。

**川村** 先頭をいくのは、多くの全国の祭りでも神輿を先導  
する猿田彦ですね。天狗さんなんですけれども、記紀の神  
話にちなんで猿田彦が先導役を務めるという形になってい  
ます。

神輿の行列は神事かみごとをつかさどるものですので、そこで行  
われているのは、基本的にお祭りの背景となる伝説による  
んですね。そういうフィルムも実はつくっているんですけ  
れども、日本民俗学とかは基本そっちを中心に撮りたいん



神様岩と神輿



猿田彦

ですね。民俗信仰であったり伝説との関係みたいな。そういうものを今回は脇に置いたところがあるんです。

—あのお祭りは基本は山王権現になっていきますが、日吉の神様は漂着神の伝説を持っています。能登半島は、寄り神とか漂着神が恐らく六十とか七十ぐらいあると言われていて、皆月の山王祭もそういう漂着神の伝説を持つ地域の一つです。

—ちょっとだけ解説で書いておきましたけども、神様が最初に流れ着いたのが神様岩というものだったそうです。伝説によると、その神様は岩にたどり着いてから小さな子供になった。あの岩のお隣にある喜兵衛さんというお家で三年間仕えていた。その後、喜兵衛の家は村の北側なんです。南の端のほうにある庄佐というお家に移って、そこでも三年務めた後に、最後にその家の井戸で身を清めて、神様として日吉神社に鎮座した。そういう話になっていて、結局お祭りでも、まず神様岩を回った後に、庄佐というお家の近くの村外れのところで神事がおこなわれています。

**日高** そうした信仰といいますが、伝承というものをとにした形でルートも定まり、あの形でのお祭りがおこなわれているということで、山王祭の背景的などころを大体、ご理解いただけだと思います。

—次は、川村先生のほうでこの映画のプロモーションビデオを昨日つくって完成して、持ってきていただいたので紹介いただけますか。

**川村** この映画ではなくて。

日高 続編です。この山王祭が次どうなっていくか、これをこれから調査していくということですよ。

川村 多分このなかでご覧になった方もおられると思うんですけど、二週間前に、この企画の一連で、我妻さんの「願いと揺らぎ」という作品をみせていただいて、いたく感動してというか、逆にとっても悔しかったんですね。やられた感がすごくあって、彼の最初の作品も実はみんなくみせていただいたんですね。あのときはまだ勝てるなど思ってたんです。「いけるわ、これは」と思っていたら、この前みたときに何回か泣いちゃって、いかなど。私の作品に足りないのは泣きではないかみたいなね。

考えてみると、皆月の映像は笑ってばっかですからね。笑って、酔っ払って、叫んでるぐらいのうちの連中をもうちょっと戒めないといけないということで、「願いと揺らぎ」をみた後にLINEに、これこれこういう感じで、君たちもうちょっといい絵が欲しいと言ったら、ほんとに送ってきたんですね。その映像を使いながら第二部もつくろうと心に決めました。二、三分の予告編にしようと思ってたんですが、十分ぐらいになってしまいました、長めですけどもつくってみました。

日高 そこまで裏話を言わないように気を使ったつもりだったんですが、全部自分で出してしまったのであれなんですけれども、ちょっとその映像を早速みていただきたいと思います。お願いします。

(上映)

**日高** タイトルは「二〇二二年冬」ですか。行けるといいのですが。

**川村** 適当につけました。というか、今年勢いでつくればいいんですけども、ちょっと日和りました。

**日高** でも、本当に再会ができるといいなと思いますし、この映像で登場していろいろとお話いただいた皆さんの気持ちというものが正直なところだと思います。私たちも十分に共有できる思いかたと伺っておりました。

それでは次に、ちょっと話題を変えて、こういう民俗史映画というものをどういう形でつくっていくのかということについて話を進めていきたいと思えます。

先ほど川村さんのほうから、二週間前に行ったみんぱく映画会「願いと揺らぎ」という我妻監督の映画を紹介いただきましたけれども、あの映画はドキュメンタリー映画になります。今日の川村さんの映画は、映画のくくりでそういうものがあるのかどうかはわからないのですけれども、歴博のほうでは民俗研究映像という言い方をされています。民俗誌映像とも読み取れる言い方かと思えますけれども、この民俗研究映像とドキュメンタリー映像の違いについて少し教えていただけますでしょうか。

**川村** 先に言うておくと、私自身は民俗学とか人類学をやっている者の立場で撮っているかという、必ずしもそうではなくて、むしろいわゆるドキュメンタリーに近いところでやっている部分があるんじゃないかなと意識としてはあるんですね。

一応、歴博の民俗研究映像の位置づけとしては、古い記録や作品を作った先生の話を見ると、

要は映像を用いて論文を書くように、研究の表現方法として映像を用いることであると考えるおられる方が多かったと思うんです。もちろん私もそういう部分はあるわけですが、いわゆる民俗映像とか記録映像というものになってくると、例えばお祭りであつたらお祭りの式次第を、極端な話をすると映像をみて再現可能なぐらいに忠実に撮っておくことが最終目的としてはあるように思います。

記録保存用とか、あるいは教育用みたいな形式もあります。芸能であれ、技術であれ、直接学べばそれにこしたことはないけれども、何らかの形で行事の継承が断たれてしまいうさだとか、あるいは、この部分がうやむやになっているぞみたいなどころを映像でしっかり残しておくことで次の世代にもつなげていこうと。そういう形での教育とか、広い意味での活用みたいなことを念頭に置いたものが民俗映像としてはあり得るだろうと思うんです。

だけど、ビジュアル・フォークロアというところでつくられている映像作品とか、この前の我妻監督がつくられているような行事のさらに向こう側、そこで生活している人そのものを突き詰めていくような映像のスタイルみたいなものとか、グレーゾーンはいつばいあつて、正確にはぴりっと分けられないんじゃないかなと思います。

**日高** こういう祭礼の映像というところでいくと、もちろん準備があつて、本番があつて、後片づけまであつて、その一連の流れをずっと丁寧に押さえていくところは多分大事な部分なのかと思うんです。今回の特別展の参考図書として『継承される地域文化』という本をこの三月に出版しております、そこに民俗芸能の映像をずっと撮り続けている久保田裕道さんの論文

も掲載しています。彼も、芸態を押さえるということとあわせて、それをやっている人たちの思いがどうなのかとか、そういったところまでを切り取っていかないと、いわゆる継承していくための芸能の映像、祭礼の映像にはなっていないんじゃないのかということを書かれています。そうした点で言うと、先ほどおっしゃられたドキュメンタリー的な手法がとても重要になってくるのかなと思います。

いずれにせよ、撮る人間と撮られる側の人間との信頼関係がなければ、こうした映像はつくれない。川村さんが三十年間あそこに立っていたということでの信頼関係のなかでの映像だと思えます。そして、それくらいのスパンがかかっていくものなんだということが、人を撮っていくということ、日常を切り取っていくところでは必要になってきます。

そうした民俗誌映像を撮影する、あるいは制作するという実際の作業が入ってくるわけですが、そうした作業のポイントみたいところ、気をつけているところはどこか教えていただけますでしょうか。

**川村** 今日久しぶりに見直してみても、編集しているときから、カメラが撮れてない、思う絵が撮れてないのが結構あるんですね。三章のところでも、カメラのレンズ拭けよと思いつながら見直してたんですけども、本当に台風がひどくて、潮が常に飛んでくるような状態だったんです。一周回ってあれもよしかなみたいなの、ちょっと甘くみてしまっているところもあるんですけども、カメラはいろいろと試しました。

あそこの映像で今となってはきつい絵の部分とかあったんですけど、何種類かビデオカメラも

試して、一眼レフのカメラで動画を撮るということも試しにやるなど、さまざまなことをしてい  
たんです。ただ私自身はカメラワークはいろいろ考えながら撮っていったというか、そこで勉強  
したんですけども、音については全然わかってなかったんですね。

今日の映像はまだましになったほうで、歴博に内田順子先生という民族音楽学の先生がおられ  
て、彼女が何とか聞けるものに直してくれた。そのあたり、自分が撮っているところに対してす  
ごく無頓着なところもあって、つけてもらうタイプのマイクであったり、集音マイクもあり得るん  
だけれども、できるだけ自然の状態で撮りたいなみたいなどころもあって撮っていくと、どうし  
ても音に対して不満が出てくる。これは、テレビとか効果音を自由につけられるものとは違います。

映像でだした音楽は、もはや元会長で映像にも登場した小谷君の下手くそなギターであったり、  
笛であったり、一応全部地元の音に限定して使っている。そこは、ドキュメンタリー性や民俗の  
記録映像として余計なものは付加しないように気をつけてきました。ただ、編集は今みたらちょっ  
ときついですね。もう一回やり直したいところがいっぱいありました。

**日高** 我妻さんに習って。

**川村** 彼もどんどんうまくなっているじゃないですか。ちょっと勉強し直そうというつもりでやっ  
ております。

**日高** 音というのはやっぱり大事なんですね。僕らがプロ仕様のカメラじゃないもので撮ってい  
るときに、一方向しかとれてこないということがありますから、制作するときに音の調整はと  
ても大変なものになっています。

あと、撮影するときポイントを決めたりとかしています？

**川村** 割合いいかげんなんですけども、いま日高先生おっしゃったように、カメラが複数あるにこしたことはなくて、近景、中景、遠景の三ショットぐらい方向を変えながら撮っておけば、編集のときはすごく楽になります。それができなければ、随時動きながら距離感みたいなものを大事にしていく。インタビュアーにしても、定点からの画像をぼんとみせるのも一つ方法ではあるし、いい表情が撮れていれば、あえてやりたいときもあるわけです。そういうこともあるけれども、手法としては、ある程度のめり張りをつけるために距離感みたいなものを出していきたい。

あと、最近、ほかの作品を見ての感想になりますが、できるだけローアングルにこだわったほうが現場感みたいなものは出せるのかなと。この祭りでも、高さについては比較的注意して、特に曳きヤマの映像では、家の上からせめてもらったり、宮の倉庫の二階にへばりついて撮ったりしていたんですけども、あんまり下からは攻め切れていないなとちょっと反省して、最近はそのいうところを考えています。

**日高** 切り取る場面をどうするのかといったところも大きなポイントになってくる。私の場合には、保存修復とかが専門になりますので、私がつくるのは、こういう修理をしましょうと、地域の人たちと修理をするときにマニュアル的な映像をつくるんですけども、そこでも人がどういう体の傾け方をしているのか、それが遠景になりますね。どういうふうな修復しているのかといったところで、手元に近いところ、それも手だけを撮っているんじゃないかと、手が体のどの位置にあるのかというところを注意して撮る、そして最後にぐっと、物と手がどういうような関係にあ

るのかということを示す、そうした映像の撮り方をしていくところと共通しているところもあるのかなと思いました。

ただ、私たちの場合には結構無機質な映像になりますので、音とかはあまり工夫していないんですけれども、いろんなカットを撮っておくのはとても大事なことだと思います。

**川村** そうですね。打ち合わせでも言ったんですけど、僕自身が映像のイロハというか、ビデオ撮影をするときに唯一師匠といえる存在として、みんなにおられた大森康宏先生から教えていただきました。いま日高さんがおっしゃったように、物をつくる技術の様子は、論文にいくら書いても伝わりにくいけども、映像はそこをそのまま映し出してくれる。ただ、それをのんびんだらりと撮るんじゃないかって、撮影の際の角度があったり、近い遠いがあったり、奥行きや空間を描き出すことで、人間がおこなう身体的な所作を記録する上で、すごく映像は大事だというのは教えてもらった記憶があります。

**日高** 当館の名誉教授の大森先生に習ったんですね。うらやましい。大森先生の映像もみんなくいろいろな場所で見ることができまので、また見ていただけたらと思います。

それでは、その次のテーマとして、今回の特別展「復興を支える地域の文化―3・11から10年」の関連企画として、川村さんにもご参加いただいているんですけども、地域文化の継承の可能性といった話題に引きつけて、今回は映像という形で何が見えてくるのかということをご紹介したいと思います。まず、地域文化の継承の可能性について、川村さんの今のお考えをお聞かせいただけますでしょうか。

川村 先ほど申し上げたように、映像に残しておくことが将来への記憶の種子じゃないけれども、こういう行事をおこなってきたんだよという資料として残していける部分は間違いなくあるだろうと思うんですね。

実際、山王祭は途絶えるかもしれない危機的な状況にあります。ほかの私が通っている地域でも祭りが存続の危機になったり、伝統的な芸能の後継者がいないというところは幾らでもあるんです。そういった場所である時点の芸能の記録をしっかりと残しておく、やり方についてまで詳細に残しておくことで、今後継承が難しくなっても、いつかその地域に関わる人たちがまた復活したいというときに、その映像を見ればやり方がわかるといえることがあるんじゃないか。例えば愛知県の奥三河でおこなわれている花祭りとか、国指定クラスの文化財においては、そういう形で記録されていると思います。

やり方を残して、それまでの地域とは関わりがなくても、あるいはその芸能そのものの、その祭りそのものの継承ではなくても、映像にインスパイアされる形で、芸術活動であったり、さまざまなイベントのような形で利用され得るかもしれない。もちろんそこには是非はあると思うし、いろんな問題を考える必要があるけれども、それを踏まえつつ、いろんな人間が関わりながら、新たな形でほかに展開させていく可能性みたいなものもあり得るだろうと思っています。

これはこの後の話とも重なるかもしれないかもしれませんが、映像自体が、やっている人たちのモチベーションの一部になればいいなと考えてつくっているところがあって、先ほどのPVも早速、限定公開でYouTubeに上げております。それは皆月の青年会の人たちがみてくれたらいいなと

いう形でやっているわけですけども、映像に自分たちが映っている、自分たちはこう切り取られるんだなということ、時には批判も来ますけれども、すごく喜んでくれる部分もあって、そこは大事にしていきたいなと思っています。

**日高** そのモチベーションというところでいくと、まさに撮っている人、撮られている人が双方向に結びついていくことの一つの可能性なのかなと思って聞いておりました。

先ほど見ていただいたPVは、LINEで送ってきているんですね。皆さんは携帯で撮っているんですか。

**川村** 携帯ですね。もちろん全部ではなくて、序盤の中心は小谷絃樹君です。映像でどアップになっっているのは、彼が縦に撮ってきたから編集したんです。横に撮ってくれと思うんですけども、もう一人の升本一理君はしっかりとつか、あの角度はでき過ぎてますよね。自分で全部セッティングしてやっているんですね。背景の床の間のところまで全部選んだ感があるんです。そこまでは考えてないかもしれませんが、私がお願いしたら、ああいう映像を撮ってきてくれる。

ちなみに、ギターはやかましかったですね。あれちょっと調音しないとイケないですけども、あれも小谷兄のほうです。ナレーションをやってくれたお兄ちゃんに、君の絵は要らないと言ったら音楽を送ってくれたので、使うことにしたんです。そういう形で、コロナもあるけれども、私が見に行かなくても撮れてしまえる時代になったんですね。

**日高** コロナという点では、今回の特別展でも、第四章のところ「女川のちの石碑」というプロジェクトの紹介をしています。あの石碑は、二〇一一年に中学校一年生に上がったばかりの

生徒たちが、社会科の授業で町の防災計画をつくらうという課題に取り組んだときのアイデアがもとになっています。そして防災計画をつくっただけではなくて、どう実現するかというところ次に彼ら自身の関心に移り、周りもそういう形で応援するということがあったのですけれども、この震災の記憶を残すというテーマから石碑をつくっていくことになるんですね。女川町の二十一か所に津波が来なかった地点に碑を建てるという形でプロジェクトを進めていきます。

さらにすごいのは、自分たちでどういう石碑をつくりたいか、デザインまでを考えています。女川というところは中世の板碑がとでも残っていて、斜めに落とした形のものが多いそうです。そのデザインを町の象徴の形と捉えてデザインをしたそうです。また、石碑をつくるのに自分たちで募金活動を始めていて、そのとき、皆さんは修学旅行で東京にいくんですけれども、ドイツ・ニーランドに行かずに、駅前で募金活動をして、資金を調達することをしています。

さらに、今、大学四年生になろうとしていますけれども、そうした彼ら自身の経験をもとに教科書をつくっていくということ、学校で使ってもらえるような教科書づくりを二〇一一年以降ずっと続けています。こうした活動について話を聞きたいということで、私は本当は聞き取り調査に行く予定だったんですが、コロナ禍でいけなくなりました。そこで、お互いパソコンを持ち寄って、オンラインでみんぱくと現地をつないでインタビュー調査をしていく。そういう映像をつくりました。状況に応じていろいろとカスタマイズしていく工夫は、こうした映像でもとても大事なんですよ。

**川村** あ映像はすごい革新的でしたよ。最初わからなかったんですよ。パッドがちよっと端の

ほうにあつて、日高さんの声が聞こえてくる。えっと思つて確認したら、オンライン越しに日高さんが問いかけて、大学生やその元先生に対して、要するにテレビ電話状態でインタビュしているという形なんです。バーチャルな空間でフィールドワークができてしまう。これはすごいな。

LINEであつたりSNSを今の世代は使いこなしている。それに研究者も対応しないといけない。今日もそうなんですけども、研究者も博物館もこういう形でのつながりは、バーチャルなもので実体化できていないように思うんだけど、実は我々の生活はそういうものに大きく影響を受けている、すごく依存している部分もある。良い悪いはおいといて、そこを含めての研究活動なのかなとすごく思ったし、それを実際に取り入れて展示にまで使つてしまうのはかなりすごいなと思いました。

**日高** 今回の特別展はいろんなところで映像が出てきています。そこ辺も楽しんでいただける部分かなと思つているんですけども、映像というものの可能性について、今回の特別展では、エピローグのところ、川村さんに映像を通じた地域文化の継承を一つテーマとした形でコーナーをつくってもらっています。そのコーナーについて紹介いただけますでしょうか。

**川村** モバイル展示のところですね。最終エピローグのところ、色とりどりのコーナーがあつて、そこは、日高先生のみんぱくチーム、そして私も属している歴博のチーム以外にも、国文学研究資料館、国立国語研究所、総合地球環境学研究所であつたり、人間文化研究機構という大きなくくりの組織のなかで共同研究をおこなつておりました、いろんな場所で展示できるモバイル（可

動式」というコンセプトのもとにつくった展示が一堂に集められています。それぞれの研究のテーマや成果に基づいて展示を行っております。そのなかで私が担当させてもらって、一つは今日の「明日に向かって曳け」のコーナーもあるんですけども、私のなかでは過去、現在、未来を踏まえた映像というイメージがあるんですけどね。

実は升本一理君のお家は酒屋さんでもあって、かつては皆月の海のイワシの刺し網漁の親方の家だったんですね。そういう意味では、地域のなかではかなり裕福というか、上層部に当たるようなお家だったと思います。そのお家に、皆月の戦前、一九三〇年代の終わりぐらいから四〇年代、五〇年代頭ぐらいまでの間に撮られた十六ミリフィルムが残されていた。ちようど祭りの映像を撮り続けていたところにお家の方が思い出してくれて、だけど、最初フィルムのありかがわからなかったんですね。ところが、この本編にはあまり出てこないんですけども、一理君の弟、オッサマと地元では呼ばれているんですけども、オッサマがなぜか覚えていた。

彼がじいちゃん子で、おじいちゃんからその話をいろいろと聞いていたみたいで、逆に長男のほうは知ら



特別展エピローグのコーナー

なかったんですね。弟が「俺、知つとるよ」と言い出して、物の十分ぐらいで見つけて持ってきてくれたのがその十六ミリフィルムで、中身を見るとそんなに状態も悪くないということで、それをデジタル化させてもらって、そのなかの抜粋の映像を四つのモニターに分けて紹介しているコーナーがあります。

それは地域の戦前だと考えられる祭りであったり、親方のお家なので、新しい船の進水式で餅まきした映像であったり、あるいは地域の古い（当時は最新式ですが）自動車が走っている映像が出てきたり、これは戦前とわかるんですけども、尋常二年生みたいな文字が出てきた運動会の様子とか、そういう様子を紹介しています。

もう一つ、未来形というか、これから開かれた映像をイメージしてつくったのが春祭りの映像です。こちらははつきり言って地味なお祭りなんです。ただ、それでも神輿の行列は出て、村方で太鼓をたたいていた祭りが、二〇〇八年以降休止になってしまいます。台風が来た祭りのときと一緒に、宮のなかで神事が行われて、直会（なおらい）だけという感じなんです。

二〇一六年ぐらいから青年会の升本君とかが中心になって、もう一度神輿を出したいという話を出した。だけど、村のほうでは年寄りたちが多くて、今まで一生懸命切り詰めてきた、行事もできるだけ簡略化してきたのに、なぜそんな大変な思いをするんだという形で反対されて、その年は大太鼓を回すだけにした。

その翌年もやっぱりだめで、普通春祭りは昼間渡御とぎよが行われるんですけども、夜に太鼓と小さなキリコを出して、子供たちと青年会の有志で渡御をおこなうということを経て、ようやく二

○一八年に神輿が復活する。そのときも、村方には迷惑をかけません、青年会が集まってやりますという形で、村のなかでも、壮年層であったり、六十を超えている父ちゃんたちでもやりたいよと言ってくれる人はもちろんいるので、その人たちを合わせて復活するまでというのを細かなモニターに分けて三つのコーナーでやっています。

ただ、残念ながら、春祭りも、去年も今年も結局コロナで中止になっちゃったんですね。だから今後どうなるかわからない。営みとして復活したよ、それでいいねという話ではなくて、そこからどうなるかということも一つ一つ映像として残しておく。それを一つのモチベーションに使ってもらえたらなという部分も含めて制作しました。

**日高** 中断していたものを復活させていこうと、皆月の皆さんは前向きですね。

**川村** 一部は。

**日高** そういう人たちがいるからこそ地域も元気になっていくのかなと思いつながらお伺いしてまりました。

またちよつと映画のほうに戻っていきたいんですけども、川村さんは、最後のお祭りの運営を今後どうしていくのかという会議に出席されましたけども、川村さんはあその青年会員なんですか。

**川村** もう年齢的にも無理だし、オブザーバーと言いなながら、あのときはかなり入り込んだ話をしました。青年会じゃなくて、村方に対して、八日九日の仕事と四章で紹介していたと思うんですけど、要するに浜掃除をはじめ、人足という係で村の人たちが入ってくる仕事を全部書き上

げていったら、二日に分けなくても一日で済みますよ、もっと楽になりますよという提案を事前にお願ひしてさせてもらったときだったんですね。僕は、三脚にビデオカメラを置いて、つけっ放しにして自分がしゃべったりしていることが結構多いんですけども、あのときもそういう感じで撮った映像でした。

**日高** なるほど、いわゆる参与観察ではなく、直接観察ということになるんですかね。

**川村** ほとんど関与してましたけれども。僕としてはウイン・ウインのつもりでやったんですけども、そういうのは村の人たち乗ってこないですね。

**日高** ウイン・ウインというと？

**川村** つまり、青年会の負担も増えないし、人足の仕事も減りますよという形で提案したんだけど、そこは従来どおり二日やるんですね。今もずっとそのまま。あれ提案したのは二〇一五年だったかな。変わらないですね。

**日高** そこはずっとそういうリズムだから、スケジュールを踏襲していく。それも一つの伝統なのかもしれません。二日かけてゆっくりやっていく楽しさもあるのかなと思ひながら今聞いていました。

それと、青年会の人たちが言っておられましたけれども、青年会と区の役人さんたちの間をうまく存在、本当にそれはキーになる存在になるのかなと思って聞いていたんですが、そうした存在は今どういう形になっているんですか。

**川村** あの後、二〇一八年に升本一理君が中心になって、青年会のOBに対して、つなぎ役とい

うよりは、青年会の上の壮年会とか、祭奉賛会でも何でもいいから、そういう組織を立ち上げてやりませんかという話を本格的にやっただけです。そのことに対して、もともと祭りが好きな人たちが集まってくれて議論したときがあったんですけど、そういうことを考えついたことに対してはすごく前向きで、青年会に対してもフォローアップしていくよという話はしたんですけども、そこから話が進まない。新しく組織化するまでは残念ながら至っていない状態なんです。

私、映像じゃなくて、図録に書いたんですけども、そうはいいつつ、祭り自体どんどん変わっていくはあるんです。例えばいま女の子たちが中心になって太鼓をたたいてくれます。あのなかで背の高い女性がいましたけども、彼女は実は、ゆうぼ先生こと沖平雄二郎さんの娘さんなんです。彼が若かったころ、三十代の終わりぐらいとか青年会のOBになってすぐのころには、祭りに女性なんか加わるものじゃないという考えが強かった人です。だけど、いつの間にか娘さんが白装束着て太鼓たたいているんですよ。「いいの、ゆうぼ先生」と言ったら、「うん、時代は変わる」と言われました、そこは柔軟だったりする。

青年会の規約も、皆月に生まれた皆月出身者でないと入れなかつたんですね。そういう決まりがあったから、皆月出身者であっても、出稼ぎに行っていて向こうで生まれ人、東京とか関西にいた人はかつては祭りに入れなかつた。だけど、今は、いかにして皆月にゆかりのある人間を集めるかみたいなところもあって、三章でちょっと出てくる別の家の同じ名字の沖平君は、生まれも育ちもここじゃないけど父親が皆月出身で、そうした縁で彼が祭りに加わってくれるようになった。

あるいは、さっきのPVで出てきたトラックの運転手をやっている菅君も、お母さんが皆月の出身なんです。夏休みにお母さんの実家に戻っているうちに地元の子たちと仲よくなって、祭りに参加するようになっていく。緩やかにそういう広がりがある。かつてはもつと厳しかった部分が緩くなっている部分もあって、祭りの位置づけそのものもそこで変わってきているんですね。そこをむしろ広げていけないかなと私なんかは思っています。

**日高** 時間も参りましたので最後のまとめに入りたいと思うんですけども、今日の話は、映像を通して地域文化の継承を考えてみましょうといったところが一つのテーマだったわけです。今日の映像でよくわかったのは、ものすごい世代間の広がりがあるって、そうしたところでの世代間ギャップのなかでどういうふうに継承していくのか、そうしたトータルバランスをとりながらの体制が、結果的には持続可能な地域文化の継承へとつながっていくのかなということを見せてくれた映像でもあったのではないのかなと思っています。



夜の皆月山王祭

そうしたなかでも主体となる集団がすごく熱い気持ちを持って動くことによって、周りの隣接する世代を少しずつ刺激していき、こうしましようということなどで急激に変わるものではないんでしようけれども、少しずつ形を変えながら継承していけるための体制へと地域は生まれ変わっていくのかなということを今回、皆さんと共有できたのではないのかなと思います。

特別展をみてくださいということもお伝えしたいんですけども、今コロナ禍でなかなか往來ができない状況になっております。このコロナもいずれは必ず終息すると思しますので、またそのときには、皆さんとこうした場を通して、あるいは展示場とかでいろいろとお話をさせていただければと思います。本日は長い時間どうもありがとうございました。これで終わります。

# 研究公演 じゃんがら念仏踊りみんぱく公演

二〇二二年 五月八日開催

司会 日高 真吾（国立民族学博物館）

解説 遠藤 諭（久之浜大久自安我楽念仏踊継承会）

日高 皆さん、こんにちは。国立民族学博物館の日高真吾と申します。本日の「じゃんがら念仏踊りみんぱく研究公演」は、残念ながら、コロナウイルス感染症の蔓延ということで、このようにオンラインという形で皆さんに配信させていただくこととなりました。本日、コーディネートをさせていただきますので、よろしくお願います。

開催に当たりまして、まず国立民族学博物館長・吉田憲司より一言ご挨拶申し上げます。それでは、吉田館長、お願いします。



## 館長挨拶

吉田 憲司（国立民族学博物館）

吉田 皆さん、こんにちは。大阪府に緊急事態宣言が発出中ということとオンラインでの開催となりました。今日はようこそ私どもみんぱく（国立民族学博物館）の研究公演「じゃんがら念仏踊りみんぱく公演」にお集まりいただきまして、ありがとうございます。

みんぱく館長の吉田憲司でございます。みんぱくは現在、この緊急事態宣言を受けて、全館臨時休館となっておりますけれども、この公演会は、現在、臨時に公開を中止している特別展「復興を支える地域の文化―3・11から10年―」の関連イベントとして開催するものです。

本来ですと、じゃんがら念仏踊りの皆さんには、今日、みんぱくの新装成った講堂にお越しいただいて、そのこけら落としの公演も兼ねて講堂で演じていただくはずだったんですけども、緊急事態宣言発出下ということで、今日は、あらかじめ撮影した映像を通じて、ご参加の皆さん



にはその上演の様子をご覧いただくことになりました。

3・11、東北地方太平洋沿岸を巨大津波が襲った東日本大震災からちょうど十年がたちました。三月十一日、あの日私は岩手県の宮古に前の晩から泊まっていた、朝、宮古を出て、北の久慈に着いて、そこで地震に遭いました。その後、盛岡へ出て、そこで数日間避難をしておりました。その後大阪へ戻ってきて、被災地から離れたこの大阪にいる自分に、そして自分が所属する博物館という装置に一体何ができるのかというのを、ずっと自問してきました。

大阪に帰ってすぐに大規模災害復興支援委員会という委員会をつくって、復興の支援を始めました。保存科学が専門で、その活動の中心になって、特に文化財レスキューに当たってくれたのが、今回の特別展の実行委員長で、今日のこの公演会を企画してくれた日高真吾教授です。

震災の直後、地域コミュニティそのものの存続が危ぶまれるなかで、芸能どころではない、お祭りどころではないという声も聞かれました。ですが、実際には、その年、被災地では例年以上に祭りや芸能の奉納が活発におこなわれました。私自身、震災の年の釜石・夏の港まつりの折でしたが、瓦れきの中で虎舞が練り広げられる光景を目の当たりにして、人間の生、生きることに、存在、そしてコミュニティの存続にとつての有形無形の文化遺産の価値を改めて認識させられました。

被害を受けた東北三県のなかでも、福島県は、地震、津波と同時に福島第一原子力発電所の事故という比べようのない災害に見舞われた地域です。今日ご紹介するじゃんがら念仏踊りを伝えてこられた福島県いわき市の久之浜大久地区は、原発にも近接していて、津波による甚大な被害

とともに原発事故の影響も大きかったとうかがっております。

そうしたなか、地域で受け継がれてきた郷土芸能で、死者供養の踊りでもあるじゃんがら念仏踊りが、その震災の年、二〇一一年の初盆に再開されたとき、地域の人びとにとって大きな心の支えとなったとお聞きしています。また、震災からの復興に当たっても、地域の祭り、芸能は人びとの結束のよすがとなつて、新たな地域コミュニティを立ち上げていく上での原動力の役割を果たしたようです。

今日、踊りをご披露いただく久之浜大久自安我楽（じゃんがら）念仏踊継承会の皆さまには、みんぱくの復興支援の一環として、二〇一五年一月にもみんぱくにお越しただいて、講堂でじゃんがら念仏踊りを上演していただいています。今日はオンラインの形になりましたが、この久之浜大久の継承会の皆さまによるじゃんがら念仏踊りをご披露いただくと同時に、継承会の遠藤諭さんと日高真吾教授の対談のなかで、遠藤さんから復興の過程のお話を聞かせていただき、その復興に果たす郷土芸能、あるいは地域の文化の役割とその伝承の課題について、皆さんとともに考えることができばと考えております。今日は最後までどうかごゆくりとおつき合ってください。本日はお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。

## 第一部 「開会に当たって」

日高 吉田館長、どうもありがとうございます。これから、じゃんがら念仏踊りみんなく公演を本格的に開催していきます。この研究公演は、先ほど館長からもご案内いただきましたように、特別展「復興を支える地域の文化―3・11から10年」の関連企画となっております。趣旨についてはまた後ほどご説明させていただきたいと思います。最初に、この特展について、少し映像で紹介したいと思います。

その前に、今日のプログラムはホームページで既に資料として、PDFで掲載しているように、五部構成となっております。第一部が、現在行っています、この「開会に当たって」というところでご案内します。その後、第二部「震災から再開したじゃんがら念仏踊りを振り返る」、第三部「じゃんがら念仏踊りみんなく研究公演二〇一五を振り返る」、第四部「コロナ禍でのじゃんがら念仏踊り」、そして第五部として、この研究公演は、本当はみんなくに来て実演していただくはずだったのですが、残念ながら来れないということで、今回のこの公演のために映像を収録しましたので、その映像を最後に皆さんにご覧いただけます。

それでは、最初に、この特別展の「復興を支える地域の文化―3・11から10年」の簡単な紹介映像についてご案内します。よろしく願います。

(映像)

## 第二部 「震災から再開したじゃんがら念仏踊りを振り返る」

日高 今日はいじゃんがら念仏踊りという、福島県のいわき市に伝わっている郷土芸能の研究公演を行っています。今回の特展では、郷土芸能はとても大きな展示の柱となっております。先ほど館長挨拶でもありましたように、二〇一一年の東日

本大震災のときに、たくさんの人びとが大変な思いをしているなか、「三陸は芸能の宝庫」という代名詞を持っていた三陸沿岸部でさえ、芸能どころではないという雰囲気です。自粛ムードが高まりを見せ、さらにみんなが落ち込んでいく、そうした状況がございました。

ただ、そうしたなか、勇気を持って芸能を再開し、その再開によって、また人がそこに集まり、いろいろな話をするなかで、地域の復興について話が本格的に進んでいく、そうした原動力に郷土芸能がなっているという報道なども、たくさんなされるようになりました。そうした可能性、郷土芸能の持つ力について、今日は少し考えていきたいと思います。



特別展における「じゃんがら念仏踊り」の展示

じゃんがら念仏踊りと言いながら、なかなか、じゃんがらに行き着かなくてすみませんが、今回の特別展の第一章で、郷土芸能の持つ力の可能性を紹介する展示コーナーをつくっております。ちよつともたもたした私の解説つきの映像ということになるんですけども、この公演が始まる前に郷土芸能について少し考えていくために、第一章の展示解説の映像をこれからご覧いただきたいと思えます。それではよろしく願います。

(映像)

いかがでしたでしょうか。特別展の第一章の概要を紹介させていただきました。この紹介映像のなかでも、今日のじゃんがら念仏踊りについて簡単な解説を入れました。じゃんがら念仏踊りは、いわき市を中心に、北は大熊町、南は茨城県北茨城にまで分布する郷土芸能です。この芸能の一つのポイントは、供養のための念仏踊りであるということです。この供養の念仏踊りは、二〇一一年の震災後、間もなく



2011年に再開した「じゃんがら念仏踊り」

して再開しました。このあたりの事情は、後ほど、ディスカッションしていきたいと思っています。そこで、二〇一一年当時の様子も振り返りながら、このじゃんがら念仏踊りの活動についてご覧いただきたいと思っています。それではよろしく願います。

(映像)

**日高** 皆さん、今、第二部「震災から再開したじゃんがら念仏踊りを振り返る」になっております。ここからいよいよご登壇いただきたいと思っています。久之浜大久自安我楽念仏踊継承会の遠藤さんです。遠藤さん、こんにちは。

**遠藤** こんにちは。

**日高** 今日はよろしく願います。

**遠藤** こちらこそよろしく願います。

**日高** 普通は楽しく話しているんですけども、こういう場で話すと緊張しますね。

**遠藤** かなり緊張しております。

**日高** とはいえ、心地よい緊張感で進められたらと思いますので、よろしく願います。

**遠藤** よろしく願います。

**日高** 映像では、じゃんがらの再開に当たって、基本となる衣装・道具類の流出、そこからまた整えていくことで再開が始まったという字幕も流れておりましたけれども、まずじゃんがらの道具類



とはどういうことなのかについてちょっと教えていただけますか。

**遠藤** それではまず、私たちの衣装には、鉢巻きがあつて、手甲(てっこう)というのがあります。ちょっと見えづらいのですけども、たすきがあつて、浴衣を着ております。これは当時の民族衣装で、浴衣で過ごしていたという形の衣装となっております。持っているものとして、先ほど大きな音が鳴っていましたが、こちらは鉦(かね)です。こちらは、馬の足音だったり牛が歩く音を表現しております。

続きまして、こちらに南無阿弥陀仏と書いてある太鼓がございます。こちらは長いひもがついているのですけども、これを腰につけて踊っております。特徴的なのがこちらの太鼓のばちで、前のほうには馬のたてがみ、こちらにはウサギの毛があしらわれたものを使っております。このような形で回して、上から下へと表現していきます。これは火の玉をあらわすとも言われております。

**日高** 非常に細かな部分にまでいろいろと意味がある、あるいは動きのなかにも意味があるということ、ご紹介いただきました。どうもありがとうございます。



太鼓の衣装



鉦の衣装

それではいよいよ本格的にお話を進めていきたいと思います。まず、二〇一一年の段階で芸能を再開することは、とても勇気がいったりとか、決心がいったりしたと思いますが、再起に向けて進んでいくに至った背景といえますか、理由といえますか、そうしたことについてお聞かせいただけますか。

**遠藤** まずは、この震災があったからこそ自分たちはやってきたというのも一つの理由ですが、その前に、自分たちは十五年以上、地域の活動をいろいろ尽力してきた、またそういった活動を行ってきたことよって地域の人たちから認められたという部分もございます。

このじゃんがらというのは立ち上げてまだ間もないということもあるんですけども、当時、このじゃんがらをやるに当たって高齢者の方々からいろいろな意見をいただきました。当時というのは、盆踊り保存会というものがあり、その盆踊りのなかでじゃんがらをやって供養したいなという高齢者の方々の思いや、そんな思いに自分たちも応えたいという思いのなかから一つ実施したところがあります。

もう一つ。当時、不景気のだ真ん中というところもありましたので、当時、地域の祭り事として諏訪神社の例大祭の山車奉納とか、さまざまな各種事業、イベントなどに携わっていましたが、それも地域の方々からの援助をもっておこなっておりました。しかしそのことによって、地域の子どもたちにはちゃんとした大人の姿を見せられる行動というのができていたのかなと振り返られます。そしてそのことによって、自分たちのこれからの活動の一端として、子どもたちに、正しい大人、こんな大人になりたいという姿をみせてあげたいという思いのなかから、じゃんがら

をおこなった経緯があります。

そのことによつて、地域の方々から、当初は、若い者がやっているじゃんがらなんてというお話もありましたけれども、震災を機に、地域の伝統芸能じゃんがらというものに移行していった経緯もあります。

**日高** なるほど。そうした背景、まずは十五年続けてきた経緯があり、継続していくことよつていろいろな対話ができる土壌がどんどんつくられ、再開の機運も高まったということが一つあったということでしょうか。

**遠藤** はい、そうですね。家財や家々が流出して、地域の住民の方々も避難しているなかで、自分たちもこれからどうすればいいかといったときに、最初の思いは何だったんだという話から、自分たちはこういうときだからこそ、こういう芸能を行つて人々の心の支えになるような活動をしていくべきではないかというような、会員からの賛同を受け、自分たちが持っていた自己資金を全部地域復興の助成金として寄附させていただき、自分たちはマイナスからスタートしたという経緯もございます。

**日高** なるほど。まさに郷土に根差しているからこそその動きだったのかと思います。実際、再開されたときの地域の反応はどのようなものでしたか。

**遠藤** あまり、プラスな意見はありませんでした。おまえたちは金もうけをやるのかとか、地域の方々からさまざまなお意見をいただきました。そういう状況はありましたけれども、先ほど言いましたように、やはり、自分たちが誇れる姿を見せなければ地域の復興はないという思いと、

あるテレビ番組のなかで、あなたの姿を見て私たちは帰ってきたという方もいらっしゃいました。また、YouTubeなどでご覧になった方が、あなた方の姿を見て感動してあなたに会いに来たという方もございました。

そのことによって、地域の方々から、先ほどもお話ししましたけれども、ただのじゃんがらという芸能ではなく、地域の芸能、そして亡くなられた人たちの供養をしてもらえるものと位置づけられたところがございます。

**日高** 遠藤さん自身は、そうした地域の反応を見ながら、自分たちがやっている活動への気づきとかというのはあったんでしうか。

**遠藤** はい。大きく、やはり、先ほどの十五年間のさまざま自分たちの活動があったことによって、地域の方々との絆があった。そして地域の方々お一人お一人を知ることができていたので、物事を進めようとしたときにあまり弊害もなく進むことができた。それ以上に、自分たちがお世話になった人たちを供養することができたというのが一番心に残るところもでございます。

なおかつ、震災当時は、自分たちのこの手で遺体を引き揚げなければならなかった。遺体を引き揚げたときに、普通ならば、亡くなった人の姿を見て手を合わせることは皆さんするかと思いますが、そういうことすらできなかった状況もありました。その後、こういった芸能を続けることによって、地域の人たちからも「ありがとう」と言って涙を流していただいて、感謝の言葉をいただけるようなきっかけができました。そこから感謝と祈りを伝える活動という形で始まります。

**日高** なるほど。またちょっと話が戻るかもしれませんが、活動の再開にあたって、遠藤さんの

思いは遠藤さんの思いとしてあるんでしょうけれども、メンバー全員のそれぞれの人たち、被災された状況もあるでしょうし、個々の事情もあったかと思いますが、そうしたときのメンバーの方々はどういう思いをもっていらっしやっただけでしょうか。

**遠藤** その当時もう連絡手段というのがない状態だったので、集まれる人だけを集めた上で、今後どうするかを話し合いました。その当時も、家がなかったり家族を大切にしたいという思いの方は、関東だったりの身内をたどって、遠くは広島の方まで避難された方もいます。ただその方はその方でそれなりの家族の事情があったりするので、それはそれでやむを得ない。だからこそ自分たちのやれる範囲のなかで実施していこうと言って、集まったメンバーで行った経緯がございませぬ。

**日高** なるほど。そうですね。あのとき、皆さんいろいろなところに避難していかれましたものね。福島第一原子力発電所の事故というのが、遠藤さんたちの地域にはもう一つ大きなインパクトとしてあったと思いますが、やっぱり大変だったんですね。

**遠藤** それはそれでそれなりに大変でした。自分たちは地元について片づけをしながら、でも地域の人とのコミュニケーションができた。ただ、避難した人たちは知らない場所で生活しなければならなかったというのが、大きな違いといえれば違いかもしれません。

なおかつ、本当ならば亡くなった方々も地域にはいますので、その方々に手を合わせることもできたんでしょうけれども、被災して遠方に行ってしまった方々に対してはそういうものもできなかったというお話を聞いたときに、自分たちのできる範囲で、感謝と祈りという形で、イベン

トで呼ばれるのではなく、事業として行っているところに対して行脚という形で、北は秋田から（南は）大阪まで、じゃんがらで供養させていただいて、供養するとともに、避難した方々がその地域で手伝ってもらえる環境があったということで、ある程度そこも踏まえた上で、感謝という形で実施してきたこともございます。

**日高** なるほど。その感謝ですよね。遠藤さんはよく「感謝」という言葉を使われます。僕もその言葉には、とても魅かれるところがありますけれど、遠藤さんたちのそうした感謝、あるいは祈りというものを伝える活動について、もう少し詳しく教えていただけますか。

**遠藤** 先ほどもお話ししましたように、自分たちの場合はできることは少なかった。あと、もうほんとに亡くなった人に何を伝えればいいのか。震災当時は遺体も至るところにあつてその方々を供養することもできなかったというのも、自分たちの心のなかにずっと重荷となっていたところもございます。

先ほどの映像（じゃんがら紹介の映像）のなかで、二〇一一年八月十四日の写真があつたと思います。そのときに、遠くのほうに喪服姿の女性の方がおられ、供養し終わった後その方が自分たちのほうに来たときに、「遠藤さんですよ。あなたに会えてよかったです。私の母はあなたに助けられたんです」とおっしゃいました。

そんな会話のなかで、「あなたに助けられてよかったです。ありがとうございました。」と涙ながらに訴えられたときの、そのありがたさは、自分のなかに抱えていたいろいろな物事が解き放たれた瞬間でもあつたというのもありました。この「ありがとう」という言葉の重さを感じさせ

られたところもあったので、「感謝」をもとに自分たちは活動をしていったところもあります。  
**日高** ありがとうございます。遠藤さんたちの活動を見て、感謝の気持ちを持つ方もいれば、そうした方々の反応を見ながら遠藤さんたちがまた感謝の気持ちを持つという、そういう双方向性の気持ちのやり取りがあったのだろーと思います。その後、これまで十年間ずっと遠藤さんたちは活動をされていますけれども、今、改めて、あの二〇一一年のめちゃくちゃな状況から、とりあえず脇目も振らずに出発し、それから生活のインフラをはじめ、いろいろなものが整い、そして本格的な復興の計画を立てていくという時間が流れているかと思えます。そうしたこの十年間のなかでの遠藤さんたちの地域活動の振り返りということで、どういう思いを持ったのかについて教えていただけますか。

**遠藤** 確かに十年間は十年間ですけれども、この目まぐるしい時間の速さというのはとてつもない内容でした。私たちの生活パターンとして、その当時は朝五時から大体夜中の十二時まで、さまざまな地域の活動と片づけ、ボランティア活動、そして仕事にどうつなげていくかなどを考えて実施しておりました。

そのなかで地域の物事ですと復興対策協議会とかそういうものがございまして、行政と住民をどうやってまとめていくか、そのような苦悩もございました。どうしても組織として成っていないこともあって、順調に進むことはないなかでの活動が日常茶飯事の内容でした。さまざまなボランティアの方々が、地域のなかで活動していただくこともありました。そのなかでも、想定（上手くないか）と理解しながらおこなわせていただき、ここに生きている）していたことにも感謝

という意味がありました。

しかし、ボランティアの方々や活動をするなかで、いろいろな情報が交錯します。交錯することによって、自分たちがボランティア活動をしていたとしても、「あなた方もあのNPOやボランティアの人達のようにお金をもらっているんでしょ!」と、地域の方々からそんな一言を受けます。その一言が、自分にはとてもショックでした。お金をもらって自分たちはしているわけではなかったのに、なぜそんなことを言われなければならないのかという思い。

そして、どうしても、日本人というか、民衆とも言えるんでしょうけれども、真新しいものに飛びついてしまうというのが特徴としてあるので、それはそれでしようがないのかなとか思いながら、自分のなかで日々格闘ですよ。そういうもので自分の精神的な面も病んでいきますし、地域をこれからどうしていこうかと思ったときに、復興の形って何なのかと戸惑うところもあり、ボランティアやNPOがさまざまな地域活動をするによって多くの住民を惑わせて、今度はその住民の心理が復興の崩壊へ導くきっかけともなったところもございます。

そのことを踏まえた上で、自分たちがさまざまな活動を実施はしていくんですけども、どうしてもNPOやボランティア団体の言葉を信じてしまう住民の方々が、自分たちに対して「嘘つき」というレッテルを張っていくんですね。ですので、この後のお話にもありますけれども、自分たちの居場所が今度はだんだんと狭まっていく形にもなっていました。

**日高** 外からの支援、内側からの頑張りというところのバランス。私は自分が専門としている文化財の保存という立場で、大阪から東北に支援にいくことがありましたけれども、そこら辺のバ

ランスといえますか、私らが外から入り、その地域の人たちと一緒にやることによって、私達の思っている正義感とか、思いとかがあるなかで、一方ではその地域の内側から頑張ってもらわねばといったところでの意味づけというのでしょうか。それぞれの活動の方針のバランスをとることはとても難しいなという局面に何回も遭遇しました。私は外からいく側の人間として、そうしたところがとてもストレスであったりしたわけです。

それは、多分、外からいくことによつて、何とか早く復興へと結びつけていきたいというところで、自分たちで勝手につくってしまったタイムスケジュール的なところと、内側の人たちがきちっと地に足をつけてもう一回頑張つて地域を立て直していくというところでのスケジュール感の違いがあったのかもしれないと思います。

それと、あの当時の大変なときに頑張るところで目立ってしまうと、目立っている人ばかりに目が集まり、先ほどの遠藤さんの居場所がなくなるといのはそうしたことなのかなとも思ったのですけれども、何かやきもちを焼かしてしまうとか、いい格好ばかりしているんじゃないのかなと批判されたりする。でもそういう生の人の姿が出てくるのも、震災の大変な状況がそうさせていたのかもしれない。そうした点について、遠藤さんは、どういう形で自己解決しているかとしていたのかについてお話しいただけますか。

**遠藤** 自己解決はすごく難しいです。ただ、一つ一つに誠心誠意向き合つてその糸口を探るからこそ、諦めるとかやらないとか自分の手から放すという割り切りをしてきたというのも事実です。そのなかで、震災後ですけれども、あるNPOの代表者の方から、「この被災地で花火を上げた

い。」なんていう話を持ちかけられました。そのときに、いろいろな活動をしているので、自分がそういった形ではかの人よりもどうしても目立ってしまうというのはあったんですけども、そのなかで祭り上げられ、その代表者の方とお話をしたときに、代表者の方のお話と地域の考え方、それから地域のこれからの考えたときに、内容がちよつとふさわしくなかったのでお断りさせていただきますね。

そうすると、その代表者の方が豹変したように、「小学生でもできることなのにできないやつに用はない。」と言われたんです。これって、「えっ!」、そんな会話するんだみたいな形で自分もちよつと驚いたところもありますけれども、その一件では、その代表者とお話をしたことでその意図が自分では納得いかなかったのでやらなかった。

そうしたらそのNPOの代表の方は、また別な地域の団体の長と話し合いをして、別な団体の長がそれを請け負うような形になったんです。でもその請け負った代表者の長から私に、「おまえがやらなかったから俺がやる羽目になった。どうしてくれるんだ。」という文句が来るんですね。私は、「いやいや、やるもやらないもあなた次第じゃないですか。」と言って。

そのNPOの代表者と地域の代表者とは花火大会を実施したのはしたんですけども、そのことよってその地域の団体が内部分裂を起こすんです。「何であの人に言われたからやらなきゃならないんだ。だからこんな大変なことになるんだ。おまえらがやらなかったから俺らがやる羽目になったんだ。」と言って、今度は地域の青年会とかが分裂していくんですね。これってあるべき姿だったのかというので、自分たちもその後の対応とかにもちよつと二の足を踏んだりしたこと

もありません。そんなこともありながらも、自分たちが本当にやるべきことはどういうものかというのを日々模索しながら活動をしていったところはあります。

**日高** ありがとうございます。そういう支援活動も含めて、何をしに来たのか、何をしようとしているのか、その辺については、支援にいく側もしっかりとした気持ちを持ち、自分たちの自己表現の場にならないようにするというのはとても大事なことだと、改めてそう思います。

そうした視点から、この後、また私自身が十年間東北と向き合ってきた活動ということで、文化財レスキューという、地域の文化財を救出して何とかもとの形に戻して地域にお戻しするという活動をしてきましたが、特展では、この文化財レスキューのコーナーもあります。我々自身はどういう思いで文化財レスキュー活動に取り組んできたのかということも映像解説をしていますので、一緒にみていただきたいと思います。

**遠藤** はい。

**(映像)**

**日高** はい、この特別展の第二章で紹介している文化財レスキューの活動についてご覧いただきました。なぜ、この文化財レスキューをわざわざご紹介させていただいたかというと、実はこの映像は、遠藤さんとかとの対話のなかでいろいろ、自分のなかであのときの文化財レスキューの様相などを思い出しながら整理していったからです。

まずは、先ほどの遠藤さんの話にもありましたけれども、何でそれをするのか、つまり、なぜ文化財レスキューをするのかという心構えの問題ですよね。自分たちがどういう目的を持って文

文化財レスキューに乗り込んでいくのかということ、これをしっかりと整理しておかなければ、何か、ただいってぐずぐずとやっているだけの活動になってしまつていたのだからと思ひます。そうならないためには、しっかりとした心構え、しっかりとした目的を持った上で現地にいき、活動しなければ、支援にいったつもりが全然支援にならないと考えました。

もう一つは、怪我をしないということがとても大事なことです。応援にいつている人間が怪我をしたら、被災者の皆さんにお世話をかけることとなり、逆に応援されてしまうということになります。そうしたところのけじめはしっかりとつけなければいけないというところで、自分を守るための装備品の準備と、きちんと身に着けることの必要性について解説を入れています。

そしてもう一つは地域の人たちとの対話です。災害時の文化財レスキューでは、今そうしたことをやっている場合なのかという意見も当然少なからずあります。しかし、地域の復興のためにこうした活動が最後は役に立っていくんだということを粘り強く、地域の人と会話をし、理解をいただきながら、文化財レスキューの協力をいただく。この協力には、実際の作業に協力してもらおうとい



文化財レスキューの様子

うことも一つあるでしょう。そこで、私は、特に応急処置の活動では、もう少し社会が落ちついた状況で行われる活動なので、地域の皆さんを取り込みながら、地域のペースに合わせた文化財レスキューができないかと考えております。

そして最後の応急処置ですが、これも遠藤さんに、結構感化された表現を用いています。今、何ができるのか。一歩、距離を置いて俯瞰する勇氣です。無理に急がないということでの判断です。これは、東日本大震災で、遠藤さんだけではなく、いろいろな方々とお話しさせていただくなかで私自身が気づいたところです。こうした被災地の向き合い方について、文化財レスキュー活動に落とし込んで見えてきたことを紹介させていただきます。

### 第三部 「みんぱく研究公演二〇一五を振り返る」

**日高** それでは次に第三部「みんぱく研究公演二〇一五を振り返る」に入ります。いよいよ私たちと遠藤さんが出会うことになった二〇一五年のお話です。この年、遠藤さんと本格的にコンタ



文化財レスキューの装備品の展示

クトをとり、みんぱくで研究公演をしていた  
ことになります。そのときの当時の映像を振り返  
りたいと思います。映像をお願いします。

(映像)

日高 二〇一五年に遠藤さんたちに来ていただ  
いた研究公演の一部をご覧いただきました。何か懐  
かしいですね、遠藤さん。

遠藤 いや、若いですね。(笑)

日高 楽しかったですね、あのときには。

遠藤 はい。

日高 終わった後も皆さんと一緒に本当にいろ  
ろな話をしました。私もあのとき、東北地方との  
向き合い方というのでしょうか、そうしたものが  
自分の頭のなかで整理できて、「ああ、こういうふ  
うに進めていったらいいのかな」みたいな気づき  
を得た、とても思い出深い研究公演となりました。

これから、あのときの語り、あるいはその後の  
話のなかで遠藤さんから聞いた幾つかのエピソード



2015年のみんぱく研究公演

ドをもとに、お話を伺っていきたいと思います。あのとき、二〇一五年という時期で、被災地といえますか、東日本大震災の被災地は、まだまだ大変なんだという時期でもありましたが、みんぱくで、このような研究公演をやると、じゃんがらもそうだったんですが、ほかの郷土芸能の研究公演でも、関西在住の方で、もともとその出身者の方々の出会いが合ったと聞いております。そうしたなかで、遠藤さんたちも福島県出身者の方々との出会いがあったと聞いております。あのとき、突然空港まで見送りに来られたときのエピソードを思い出しながら紹介していただけますでしょうか。いかがでしょう。

**遠藤** 大阪の皆様には、公演会場いっぱいに来ていただきました。そのなかで、福島出身なんだとか、いわき出身なんだという方々とお会いすることができました。また、自分が知っている方の兄弟なんだという方々も結構いらっしゃいました。あれから六年近くたつなかでお礼一つもまだ言えてなかったのが、先ほど日高さんからお話がありましたけれども、その方は「ゆみおばちゃん」なんて言っておられました。空港まで見送りに来ていただきました。そのときに、手づくりの菓子箱におにぎりをいっぱい、あと、バレンタインだからチョコレットなんて言って、くれた、そんな思い出がありながらも、その当時は自分たちから本当に精神的にちゃんと整理できているかといえ、できてない状態でした。身の振り方もわからない。ただ、地域復興と言って、ハードだけの計画はできているけれども、ソフト的なものがこれからどうなっていくんだという迷いのなかでもありました。

そんなときに、阪神・淡路大震災のときの教訓ではないですけども、口伝えに言われたこと

が、「震災はバブルだ!」と。自分の身の丈以上のことは一切するなと言われたんですね。確かにあの震災後さまざまな物事は動いていくんですけども、本当にそれが正しいのかどうかとか、なぜその意見にたどり着いたのか、関西の雰囲気とか人を知りたかったというのもあって、大阪に呼んでいただいて、その感性、感覚、物事の捉え方を、三日間という時間の中ではありましたが、日高さんとともに酒を交わしながら捉えることができたというのは、自分のなかでもすごく勉強になりました。その感覚は今後の復興にもすごく役立つものでもありました。

自分たちは二〇一五年の、みんなばくの研究公演以降、帰ってきてからも、自分たちの身の丈に合った内容で事業を進めています。事業だったり、仕事だったり、自分たちのやるべきことを精査しながら実施していったところもございます。

その公演のなかで日高さんと、ここにはいらっしゃいませんが、橋本裕之さんとの対談のなかで、橋本さんとは日高さんと会う前にわらび座の菅野紀子さんとのご縁のなかでつないでいていただ



みんなばく研究公演での対談

いた、自分のなかではとても刺激になった方のお一人ではあります。

その橋本さんとの対談のなかで、再構築を知る上でアドバイスと被災地区の状況を知り、これからおこなう事業の原点はどんなものかというのがあったと思うんですが、その原点って自分にとってすごい刺激的で、教訓になったところもありますし、その原点でどうやって自分たちを見出していかなければならないのかというのも、そのときの大きな課題として自分のなかのその後の活動に役立ったところがあります。

そして日常生活の一部になった上で、無意識の行動で自分を守り、天災に備え受け入れることができたならば、この世の中とか、この震災は別な意味で新たな形として変わっていくだろう、これからの災害の切り札とか、備えにもなるのではないか、そういう考えにも至ったところがございます。橋本さんと日高さんとのあの対談はすごく充実した思い出のなかにあります。

それから帰ってきてですけれども、大きな災害として新潟の中越地震というものもございます。新潟の中越地震の場合は、社寺仏閣の修理は十年後明けてから実施されたところがあります。なので、新潟のほうの仏閣などはきれいに残った上で、地域の人たちもそれとともに一緒に歩んでいる姿が見えました。ただ、今回の東日本大震災のときは、一民衆とそういった社寺仏閣の修理が平行線のなかで行われたことによって、そういった神仏に対しての興味やそういうものが薄れた傾向にもあるのではないかと、このごろ感じるところがあります。

それは、お寺の参拝の数であったり、あとは、核家族というところで仏壇やお寺を守るのは誰だという論争のなかで、親と離れてしまったりというさまざまな問題がこのごろ見え隠れしてい

ます。そういったところも震災の良いところと悪いところと言うならば、悪いところになってしまふのかなというのもこのごろ感じるところではあります。

**日高** ありがとうございます。そうですね。今のお話でいくと、知識を身体化していくことの重要性ですよね。知識というのは、東日本大震災の場合は、災害でとんでもない目に遭った一つの知識、それをもう少し自分たちの体のなかに落とし込むことによって、次の防災につながるのだろうと思いました。もしかすると、今回、私たちの公演のスケジュールをめちゃくちゃにしてくれた新型コロナウイルスの経験も、一つの知識として今、私たちは習得しようとしているのかもしれない。今まさにそれを乗り切るための身体化といいますか、瞬発力みたいなことを身につけているのかなと、改めて思いました。

もう一つは、復興というところでいくと、急いでやるものと、人の気持ち、あるいはその地域の気持ちを斟酌しながら進めていく復興、この二つがあるのかなと思いました。もっとあるのかもしれないですが、少なくともそういう幾つかのやり方があるのかなと、改めて伺っていたところです。

もちろん、生活を下支えするインフラは、早急にどんどんやっていくべきだと思いますが、自分たちの生活環境を取り戻していく、そうした生活環境を取り戻すということは、本来の自分の気持ちを取り戻していくことと同じことなのかもしれないと思います。今、お話を伺っています。もう一度、その地で生きていくための心構えを熟成していきながら、それに合わせた復興のやり方、もしくはそういうものに合わせながら進めなければいけない復興の内容といえますか、

事柄といえますか、そういったものがあるのかなと思いました。このことは、復興のあり方の一つとして、参考になると思います。

**日高** それでは次の話題に話を変えていきましょう、二〇一五年から遠藤さんと本格的に知り合いまして、結構、頻繫に毎年話をしていたような気がしていますが、そういうなかにおいて、今回はこの特別展のために『月刊みんぱく』で特集を組んでいただきました。遠藤さんには、「千字文」というエッセイのコーナーにご寄稿いただきました。千字のなかに、大変な思いを凝縮した文章をいただきましたけれども、このエッセイについての遠藤さんなりの思いをちよつとご紹介いただけますか。

**遠藤** この話をいただいたときに、本当に僕でいいのかなという思いがありました。エッセイになる約十年分のネタがあるので、それをずらずら書き始めましたら千字でおさまらないという状況がありました。

あと、みんぱくの今回の特別展でどのような形で展示をされるのかについて、日高さんから話を聞いたときに、整合性のあるものがある程度抜粋して、なおかつ、今後このような災害とか震災を芸能の面から有形無形に見られるような、そして人の心理を逆なでることなく、人を導くような内容にしていければなど。担当された方には大変ご迷惑をかけた部分も数々あったんですが、そういった形で、今回、このエッセイのなかには凝縮させていただいたところもあります。

**日高** ありがとうございます。このなかには、遠藤さんの活動のなかで、小学校での総合学習の時間でのエピソードなども入れていただいています。これも震災後の遠藤さんの活動のなかに加

わった新たな挑戦だったと思います。このことについてご紹介いただけますか。

**遠藤**

まず、ちょっと戻るんですけれども、今回の展示のなかで気づかされた部分と今回の総合学習の話はつながってくるんですが、展示されているなかで、芸能というものを時代化したのと、あと、神道と仏教を新たに表現した内容ってすごいなと感じながらも、これって何だろう、この導き方って何だろうみたいな形で、無意識のなかにあるアイデンティティーを身につけることで、地域住民が自立した産業などを創出していくのではないかなという思いがありました。

そのなかで、日高さんからご紹介がありました、地元の小学校での総合学習や、あと、支援学校といまして、体に障害のある方に対して伝統芸能を教えるという授業にも携わらせていただいております。それに携わる一つの理由として、自分たちもそうだけれども、この小学生や中学生が先頭に立っていかなければならないような災害が、もしかするとこれからあるかもしれない。そういうところも踏まえまして、点と点がつながり線となり、線と線が交わることによって面となる、その面がおのれのカラーを



地元小学校での総合学習での授業

出しながら、その面ができることによって地域が自立した産業や仕組み、それに向き合う活動などができるような人材を育てようと。自分たちのなかではそれを震災マネジメントの一つとして考えているところもあります。人口減少にあるといいながらも、地域自体が活性化していけるヒントがそこに埋もれているのではないかといいながら、地域自体が活性化しております。

それをやるに当たって自分たちは仕事を休みながら約半年の間、2時間の授業を約八回ぐらい行いながら、子どもたちと実施していききました。そのなかでも、自分たちの立ち位置としては教える側とは異なり、紹介のなかでは先生と言われるんですけども、私たちは教えることは一切しないということを一つ決めた上で、生徒の皆さんとセッションしていくような状況がありました。今年も地元の小学校で総合学習が一つ決まっているのと、あと、支援学校で伝統芸能をちよつと教えていただけませんかというので依頼を受けているところです。

**日高** ありがとうございます。いいですね。教えているのではなくて、セッションしている。博物館にいらしてどうしても教えるという意識で展示をつくりがちになりますが、さつきから何回か申し上げていますが、対話ということの重要性でしょうか。子ども達からも学びを得る場面というのは、結構多かったのでしょうか。

**遠藤** そうですね。気づかされるころのほうが多い。あと、核家族化が進むことによって、表面的な表現はできるんだけども、本当の根底にあるものがつかみづらくなってきたというのがこの時代なのかなというのを感じさせられることがあります。

**日高** なるほど。先ほど、この公演をするに当たって遠藤さんと話をしたとき、私たちは、二〇

一九年に台湾まで行って国際フォーラムを開催しましたね。そのときに遠藤さんが一番参考になった場面ということで映像を提供いただいていますので、その場면을ちよつと振り返りたいと思います。

遠藤 お願いします。

(映像)

日高 台湾の人、日本の人、いろいろな国の人がいて、何語でしゃべっていたかもはや思い出せないけれども、何か会話はしていたなということをちよつと思ひ出しました。どうでしょう。この映像のときに、どういったところに気づきを得たのか、ちよつとご紹介いただけますか。

遠藤 このときの子どもの表現が、自分にとっては一番勉強になったところがあります。大人たちはそれだけの知識、教養、いろいろな見聞を広めているので、そこにあった人形が擬人化されたものとして捉えている。でも子どもは子どもで、その人形でさえ同類だと認識する。そしてまず驚かせる大人たちはちよつと別においておきまして、子どもの目線ではなく視点に物事を落としたときに、子どもたちは大きな物事というか発想を広げていっ



台湾の国際フォーラムでの経験

たり、コミュニケーションをとりやすくさせるような能力が何かあるんだろうなというのに気づきました。

そのときに、そういうものもいろいろ踏まえた上で、地元の小学校での総合学習のときに、こちらがそのときつくった小冊子ですが、みえますか。何班かに分かれてさまざまな発表をしていくなかで、自分が担当した班の生徒たちがつくったのがこちらです。「時をこえたかぞく物語」というものです。大人の目線と子ども目線、そして未来へのメッセージが、このなかに含まれています。これは小学校六年生がつくりました。最初は家族のけんかから始まっていきます。

このなかでおもしろいのは、こういうった形で動物が出てきて、動物がタイムスリップさせるコーディネーターとなるという内容ですが、これも震災に関連した内容です。このなかで、やはり大人の目線で言わなければならないこと、でも子どもの感情ってどうなんだというのも、こちらのなかに含まれております。これを小学校六年生が考えたのはちょっと画期的だなと思いつつながら、自由に表現させて、自由に子どもたちに絵を描かせました。

そのことよって、まず一つおもしろいのがあります。こちらです。見えるでしょうか。こちらは、何年後かに起きるであろう災害の状況が描かれています。ただ、災害の状況が描かれているにもかかわらず、ここに時計があるのがわかりますか。時計がありません、ここに時刻が表現されています。ここまでリアルに、子どもたちは一生懸命に考えて物事を捉えていく、その姿勢は、今回、台湾での国際フォーラムに行ってこの状況を見なければ感じることができなかった。

それともう一つ。台湾の学生とお話しさせていただいたときに、台湾語でお話ししていただけ

るんですけども、ニュアンスがちよつととれなかつた。にもかかわらず、ジェスチャーで何とかコミュニケーションがとれたというのもあります。台湾の学生や台湾の方々の、社会や歴史に對しての取り組み方がすごく先進的で、自分はびっくりしたところもありました。

そのなかの一つとして、映画館のこういうポスターがあります。何を上映しようとしているんだか、自分にはちよつと理解できなかつたんですが、そこに値段表がありました。日本でいうと、大人大体二千元、子ども千円。その下に公務員八百円とあるんです。おお、何だ、これはと。担当してくれた地域のガイドの方に、これはどういうことですかと伺うと、実を言うと台湾では公務員の皆さんは普通の社会人より給料が少ないので、その分こういう公共のところでは援助しているんですというお話を聞きながら、あ、すごく斬新だなというのもまず一つ思いました。

もう一つは、台湾の歴史。日本だと、ふるいをかけて、いいところだけとった上で、何か自分に都合なところがあつたらそこにふたをしてしまつて見ないふりをする。震災後の状況をいろいろ見ていると、そういうものを何となく感じる。台湾の方々とお話ししていくと、いろいろな時代背景を受け入れた上で、自分たちがどうすべきかというものを融合しながら、時代を一枚一枚削いでいく。そんな姿を目の当たりにしたときに、僕はびっくりした。ギャップもありましたし、「あっ!」、こういう感覚というのはこれからの日本にとつても、アイデンティティーとして少し取り入れるべき内容だなと思つたところもございました。

その経験を生かしたからこそ、この一冊ができたと思つています。その経験がなかつたら本当に、先ほどから何回もお話ししますが、子どもたちと寄り添って物事を進めることがもし

かするとできなかつたのではないかという思いにもなっております。ですので、台湾で行ったこの国際フォーラムは自分にとって大きな自信ではないんですが、大きなきっかけとなった出来事でもありました。そのことに僕は感謝しております。ありがとうございます。

**日高** ありがとうございます。遠藤さんにはすごく緊張しながらご発表いただきましたが、台湾の人たちは台湾の人たちで、福島から来てくれたということでも関心を持って発表を聞いていただきました。今日のお話とも関連する発表内容で、いわきで今どういう復興活動をしているのかということをご紹介いただく講演をしていただきました。普通では、ほぼ会わないような人たちと一緒に議論ができることは、とても刺激的ですし、必ず新しいものが何かが生み出されることはありますので、フォーラムという形で、ディスカッションすることは、とても大事な場だなと、私自身も改めて感じました。

遠藤さんは、今行われている総合学習の時間について、自分にとっては人生を生きる時間の先行投資だとよく熱く語られています。私はいつも「おお」と感心しているのですが、どういう思いで、先行投資という表現を使われているのかについて教えていただけますか。

**遠藤** それには、大阪の方々が阪神・淡路大震災のときに話された言葉のなかで、昨日というのは今日を保障するものではない、今というのはあしたを保障するものではないんだというところから始まっております。

自分たちが総合学習をやりますと、平日その学校に行って、大体午前中いっぱい授業として行ってきます。それは、自分たちからすると、確かに社会人としてマイナスなのかもしれません。

しかし、そのことをやることによって子どもたちは成長する。ただ、その成長というのは、今とか明日とかに評価として出てくるものではないと思います。自分たちは、この授業を受けた児童に数十年後に本当に喜んでもらえたり、人に喜んでもらえる行動ができる人間になったり、喜んでもらえることで仕事になったり、その仕事が対価となって、その対価が数千万とか数十万とかいうお金となって税金として納められたらば、この日本はもつともつとよくなっていくなど。自分たちは、そこまでなれる人材を育てるために、今、総合学習を行っている。そういう人材がそこまで育ってくれば、この世の中はもつとよくなっていきますから、自分たちは大成功です。そのため、今、実施している最中といえは最中です。

**日高** ありがとうございます。私たちも地域文化の継承ということを提唱し、ぜひ実現させたいと思っています。それは、次の世代に少しでもいい世の中で豊かな生活をしてもらいたいなという思いがあるからです。でもそれをつくるのは、恐らく、今の子どもたちが主体となって頑張ってもらおうところになるかと思えます。そうした子どもたちに我々はどういう関わり方をすればいいのか。これも一つ、研究的にも大きなテーマですし、活動のなかでも、もしかすると一番工夫しなければいけない部分なのかなとも思っています。遠藤さんの今のお話はとても参考になりました。ありがとうございます。

ずっと話を進めてきて、少し、休憩時間を持ちたいと思います。今、遠藤さんはいわき市で一生懸命、自分への先行投資でもあり、地域への先行投資でもあるというところでさまざまな活動をされています。そのいわきとはどういうところなのかということで、いわきのPR映像を届け

ていただきましたので、ちょっと紹介したいと思います。ここで一回、頭を少し冷やして、次の第四部「コロナ禍でのじゃんがら念仏踊り」に話題を移っていいかなと思います。

まずはいわき市。いいところですね。

遠藤 はい。自然あふれるいいところです。

日高 その魅力を少し見ていただけたらと思います。それではよろしくお願いします。

(映像)

#### 第四部 「コロナ禍でのじゃんがら念仏踊り」

日高 はい、映像をご覧くださいました。いわき市へいきたいですね、遠藤さん。

遠藤 ぜひぜひお越しください。

日高 何かうまいものを食べたいな。

遠藤 ああ、おいしいです。おいしいです。

日高 何かまた、おいしい食べ物、お酒を思い出してきました。それでは、気をとり直して、また話に戻っていききたいと思います。

第四部に入ってきました。いよいよ終盤です。現在、新型コロナウイルスは本当に何と言っていいものやらという状況になっていますけれども、この話題で話を進めていきたいと思えます。

最初に、去年、じゃんがらはどうするのかなど思っていたんですけれども、決行したということで、この実行委員のメンバーであります国立歴史民俗博物館の川村先生が取材にいかれて、映

像をつくってくれましたので、そのときの様子を振り返りたいと思います。まずはその映像をご覧ください。よろしくお願いします。

(映像)

**日高** 二〇二〇年もしっかりやられたんですね。

**遠藤** はい、おかげさまでやらせていただきました。

**日高** なかなか大変な決断だったと思うんですけども、このコロナ禍のなかでもやろうと思った理由についてお伺いできたらと思います。まず、ああした状況下で、実際やろうという判断は、どういう形で行われたのでしょうか。

**遠藤** 実際やるに当たって、やはり会員とも状況を見ながら、コロナが地域で出たとかコロナの影響ということ、随時、情報交換をしながら実施していきました。また地域の皆様にも、じゃんがらをやるに当たってどういう形でしていくか、今後どのような形になっていくかを明記し告知した上で、実施しております。

そのなかで、状況は随時変わっていくので、やるやらないの判断はもう八月の当日までわかりませんということ、喪主の方々には告知をした上で実施しました。



2020年コロナ禍の「じゃんがら念仏踊り」

そのときに、こちらには個人の名前が書いてあるのであまり見せられませんが、こちらにアンケート用紙があります。ちょっと見えにくいですかね。こちらには、実施する際にどのような状況でおこなうことを、施主、あるいは家族、ご親戚の方々が望むのかという内容で明記されるような形になっています。そのことをした上で、自分たちは実施に踏み切ったところもあります。

ただ、八月十三、十四日の前々日あたりに地域でコロナ患者が出たという話もありながら、それが本当か嘘かというので、真意を確かめる調整を行いながらも実施しました。

**日高** なるほど。結構ぎりぎりまでいろいろな準備といえますか、調整をしながら実施されたということですね。ただ、じゃんがら念仏踊り自身が供養のための踊りというところもともとありますので、ご遺族の思いが、要であり急であるということ、そこにどのように寄り添うかというところが一つのポイントになっていたと思います。このとき、フェイスシールドもつけられていましたが、あれは何か工夫とかをされてつくられていたのでしょうか。

**遠藤** そうですね。フェイスシールドに関しては、市販されているものを利用したりすることも可能でした。ただ、このような鉢巻きをつくることによって、また動いたりするので取れてしまったりという弊害がうまれるということで、会員と協議をして、まず、ペーパークラフトでこういう形をつくったらどうかということでもつくりました。

次に透明のこういう形のものをつくりました。

なおかつ、制限が出ないように、鉢巻きのこちらのほうにこういうボタンがついておりまして、ここでワンタッチでつけられるように工夫しております。したがってこのなかには空間ができ

るので、多少なりとも息がしやすい状況をつくりながら、自分たちの手づくりで実施しました。これが実施できたのも、自分たちには工業や商業のスペシャリストが多く、またものづくりに対しての思いと、つくることに対してみんなが協力したのでできたということがあります、こういうものをフェイスシールドとして活用することができました。

いわき市に数百十団体あるなかで、マスクや簡易的なフェイスシールドを使ったところもありますし、一切やらなかったところもあります。でもお客様や地域の方々の安全とか安心という真意を考えたときに、どうしてもマスクをしたりこういうものを使ったりした上でやるのが最善の選択ではないかということで、私たちは実施することにしたわけです。

**日高** すごいですね、フェイスシールド。とても工夫されていたものだといいことがよくわかりました。また、画面越しにはなかなかわかりませんが、そういう仕組みだったのかと、今、改めて見て驚きました。ありがとうございます。やはりそれだけの準備をしたうえで、じゃんがらの実施だったと思うんですけども、実際に供養に行かれたお宅の方々の反応はどうだったんでしょうか。

**遠藤** 当日の朝まで、今日は本当にやるんですか、やらないんですか、どっちですかと、お客様からそういう問い合わせもありました。実施するのは前からお伝えしてあったところもありましたが、ただ、自分たちのいく先々のご家族もコロナにかかっているか、かかってないかという心配、さらに自分たちも今までコロナにかからないような生活をしていたかというのも表現していかなければならなかった。そこにお互いに総意があったことによって、じゃんがらがまず一つ

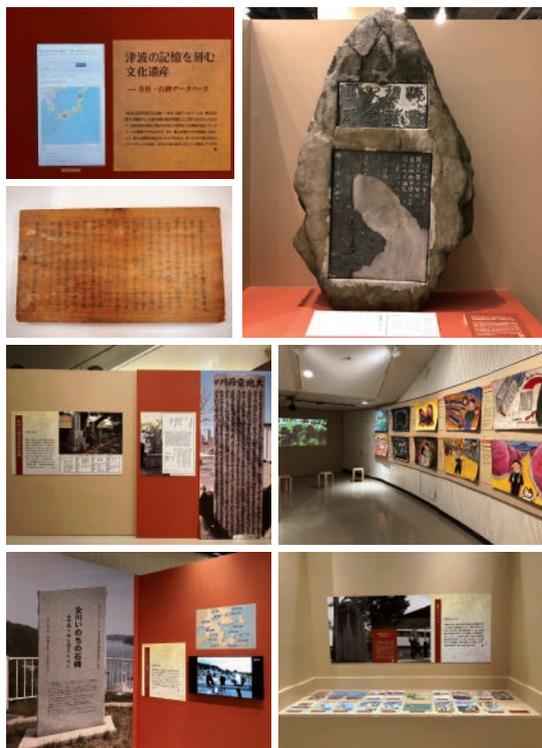
できたというのが一点。

そして、じゃんがらをやることによって、「こういう時期だったのにやってくれてありがとう。」と涙ながらに言っていただけのお客さんとの出会いというのが一番で、ああ、本当にやってよかったなと。「やってもらえないと、私はもう覚悟していた。だから今年の夏はじゃんがらを見れないんだ。せつかくの親の供養だったのに。」という思いのなかでやって、「本当にやってみてもらえなかった。遠藤さんや皆さんが来てくれたことによって、親の供養がやっとできました。」と。亡くなったことを受け入れられなかった家族が、じゃんがらをやることによって死を受け入れて、新たにもう一歩足を踏み出そうという、そのような姿勢に出会えたのも、この郷土芸能の力なのかなと感じるところがあります。

**日高** なるほど。そうですね。受け入れる一つのきっかけ。受け入れるというのは、もしかするとあの震災のときに郷土芸能にあれほどみんなが力づけられたというのも、震災のあの現実をまづは受け入れて、芸能を行なうことで次に向かう糧とする。そういうところで、芸能が大きな役割を果たしたということでした。

このコロナ禍においても、コロナだからだめかなと思いつつも、やってもらいたいという思いに駆られていく、そういう人の気持ちというところで、じゃんがら自身が供養というところできくと、そういうところではその側面はとても力を発揮するのかもしれないが、芸能全体の力として、そういうものを持っているのかなと思いました。

こういう記憶を、どう伝えていくかというところがポイントかなと思いますし、今日のこの遠



特別展の第4章の展示資料

藤さんとの対談がある種一つの形になって、このコロナ禍の状況でこういうやり方でこうしたんだ、そのときに、供養をお願いするほうはこういう思いがあり、やるほうは、こういう思いであったという記憶などが伝えられていけば、また次の危機に対して私たちは立ち向かっていけるのかなと思いました。

そういうところについては、今回の特別展では、第四章「災害の記憶を継承する」を一つのテーマにしてコーナーをつくっていますので、その解説映像を少し見ていただきたいと思います。

(映像)

日高 今、ご覧いただきましたのが第四章の解説です。ここは、災害というものに着目した形での展示となっています。展示のツボは、自分たちの経験をどう未来に伝えていくのか、そうしたこと

の事例を紹介しているところです。

人というのは、いろいろな経験のなかから学びを得て、あるいは気づきを得て、そこで学んだこと、気づいたことを実践する、あるいは反省するということで、次によりよいものにつくり変えていく、つくり上げていくということが出来ます。そして、私達の身の回りの文化が鍛えられていくのだと思います。そのなかでも災害の記憶を伝えるというのは、とても突発的で、緊急的で、危機的な状況が生み出されるだけに、見えやすい形で伝えるために、石碑のような方法がとられるのかなと思います。

遠藤さんに今日ご紹介していただいた活動は、東日本大震災というのも一つ大きなきっかけとなっているでしょう。ただ、遠藤さんの場合には、もうそれ以前から何らかの気づきを得て、郷土芸能を継承していく活動を実践しようと思われたことがあったのだらうと思います。そうして遠藤さんの経験、あるいはお仲間の人たちの経験をどう伝えていくのか、遠藤さんたちの最近の活動についてちょっと紹介していただけますか。

**遠藤** 自分たちの活動のきっかけの一つになったのが、二〇一五年の日高さんと橋本さんとの対談のなかで、橋本さんがこのようなことを言いました。「伝統芸能は心と心の共鳴が本来の残す状況をつくり出す」と。それを聞いたときに、自分の今の伝統芸能はこの立ち位置でなければならぬのか、これからどういう形で伝えていかなければならないのかという考え方に落とし込まれた一つの経験でもございます。

そして物事が科学的に解釈され表現されていくんですけれども、そこに起きるはずみをどこと

なく、このごろ感じるところもあります。そういったところで、これも橋本さんが六年前に言っていたと思うんですが、「今、五年十年で新しくそろえた道具が本当に役に立っているのか。もしかすると役に立たずに、せっかく新しくそろえた道具がそのまま使われずに残されているのかもしれない」と。

そういったことから、地域に根づく芸能を自分たちでどういうふうに確立していくかということも危惧しなければならぬということもありましたし、自分たちの行動一つ一つがこの地域を盛り上げていく、伝統をつくっていくとするならば、自分たちの今の行動をどうしなければならぬのかという形で、最近の活動を行っている部分があります。

そのなかで、今、パソコンを使ってこういったリモートという形で行っていますが、小学校の総合学習でもリモート会議という形で実施しているところもございます。小学校のほうで取りそろえたパソコンではフリーズを起こしてしまったり不具合があったので、私たちのパソコンだったりパソコンの機器を学校に設置して実施しているところもございます。

今回は、このようなコロナのなかでも、ある意味スムーズな対話、そして県内、県外の方々の関係性を築くこともできています。またこのことを前提として、他校の方々とのリモートでのスムーズな会議なども行われている状況もあります。今回、このリモート会議の内容は、教員の方々の研修会でも授業として公開された部分もありました。

最近の活動としてはさまざま、あと、支援学校を先ほどご紹介させていただきましたが、障害を持つ生徒の皆さんに芸能をただ教えることはできないという状況を目の当たりにして、それ

から、自分たちと先生とお話をした上で、その子どもたちをどうしていくか、どうすることによって、まず芸能というカテゴリーを生徒に植えつけるというか、教えるにも一つ困難な部分があった。体に障害がある子のなかには、そういった踊りも歌もできない子どももいる。そのなかでどうやって子どもたちに教えていくべきかというのを試行錯誤したところもあります。

おおすげ祭という文化祭がありますが、最終的にそのなかで子どもたちが、じゃんがらというもの、なかを短縮した部分がありますが、表現することができた。そこで、隣の人と自分も一緒に合わせようとか、隣の人が間違っていたら教えてあげようと、そういった協調性を子どもたちが自主的に学んでいった成果にはすごいものがあるんだというのを感じさせられたところもあります。ですので、取り組みとして、学校教育の場での活動が自分のなかでは大きな部分であります。

**日高** ありがとうございます。遠藤さんはすごいですね。

**遠藤** いえ、いえ。

**日高** 実際に支援学校の子どもたちの反応は、遠藤さんたちにとっても学びのある反応というか、そういうものになるんでしょうか。

**遠藤** そうですね。どうしても知っている人、普通の、と言うとおかしいですけども、何もないう子どもたちと会おうとしたときに、地域の人たちもそれならば受け入れてくれたり、あ、どこかで顔をみた人だとかいう形で子どもたちが受け入れてくれたりする環境はあるんですが、障害を持った子どもさんたちとセッションしようとすると、信頼関係もないなかで、どうしてもそこ

に大きな壁が生まれてしまう。その大きな壁を取り払わないとコミュニケーションがとれないという大きな課題があります。

それをどうやって取り払えばいいのか、どうやれば子どもたちに興味を持ってもらって、子どもたちがやりたいという意識をどうすれば向けられるのかというのも、自分なりにとか、あと先生方に聞きながら、あとは先生方が生徒の皆さんにいろいろ指導していただいた上でできた結果だったと思います。

**日高** ありがとうございます。人と人が出会うということは本当にすばらしいことだけでも、やっぱり難しいところもいろいろあるというのを、今伺っていて思いました。

さらにこのコロナ禍で、これだけ外出を控えるようにと、私の両親や叔母達は、もう後期高齢者の年代に入ってきていて、今我慢して家のなかにいるわけです。このコロナが落ちついた後、そういう人たちが外に飛び出していく勇気を社会のなかでどのようにつくっていくのかが、次の大きな課題になるのではないか。今の遠藤さんのお話は、これから意見交換をする素材となっていくのかなと思つて伺つておりました。ありがとうございます。

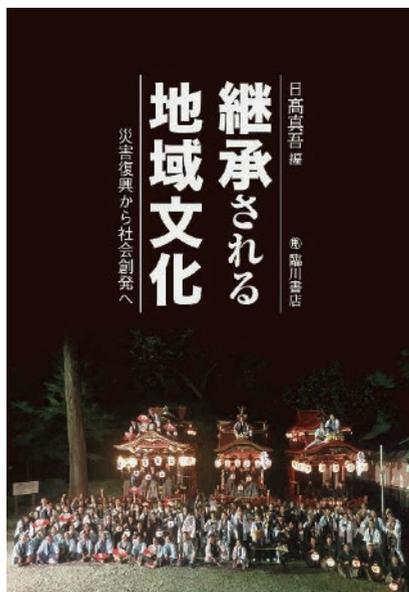
そろそろ時間も来ているところですが、この研究公演では、この十年間の遠藤さんの歩みを、じゃんがらの活動とともに振り返ってきました。次の十年なのか五年なのかわかりませんが、これも、遠藤さんの活動の次の展望といえますか、こういうことを目指していきたいといったお話をご紹介いただけますか。

**遠藤** 展望といえますと、今、確かに総合学習というものを小学校六年生に対しておこなつてお

ります。その総合学習をおこなった生徒さんたちが大人になったときに、自分たちと同じような活動ができる環境を整備したいなと思っています。そのことによって、ある程度ローテーションというか、それが地域の伝統となることによって伝統を失わなくて済む。また教育のなかで、そういった関係性を持てる。そうなると、地域に残されるべき内容がちゃんと伝承されるというのがあります。

ただ、つい最近、自分が仕事の上で社寺仏閣の修理などをおこなうに当たって、本当に自分の仕事をやっている施工が正しいのか正しくないのかというので悩んでいた部分を全部解消してくれたのがこの一冊「継承される地域文化 日高真吾編著」でした。

また、今回は震災後十年ではありますけれども、十年たったことによって、コロナの状況もあります。人々の心が、表現は悪くなっていますが、十年たったことによって、コロナの状況もあっても目についてしまう。震災のときのような苦しい悲しいではない、また別な時代が来てしまったんだなというのがございます。



継承される地域文化書影

そういう人たちが今後どのような形で未来へ一歩踏み出せるような段取りだったり、きつかけをつくるのができたりするのかというので、今後活動していきたいなと思います。自分は小学校三年生のときに仏師になりたいという夢がありまして、二〇一一年の震災があったときに仕事ができなくなっただので、仏師になってもう一度一から学びなおそうと思いましたが、復興が加速するとともにその夢も途絶えてしまいました。しかし今後は、彫刻に少しでも特化した時間を過ごすとともに、心が病んだり、前向きになれない人たちの心のアフターケアというんですか、そういった形で伝統芸能を活用したり、仏教やそういったものに着目しながら人々をよりよくできるような、そのような活動もしていきたいと思っています。

＝ 伝統芸能を継承するに当たって、道具や衣装は地域の人がつくれないものではなく、地域の一つの産業となるということに、今回改めて気づくことができました。今ある道具を地域の人たちにさわたってもらって、扱ってもらって、地域の人たちも、自分はこのものだっただけでいいよとか、縫い物だったら私ができるよ、やってあげるよといった人たちをピックアップしていった上で、産業としてこの地域に根差した文化を継承していければなと思っております。

先ほど言いましたが、こちらのフェイスシールドだって、また新たな形になれば一つの産業ともなるのかなと思っております。今回、せっかくの機会なので、こちらのフェイスシールドは伝統ではありませんが、今回の震災、またコロナ禍から生まれたものでありますので、こちらのほうもちょっと時間はかかるかと思いますが、みんばくに寄贈させていただいた上で、今後の対応もさせていただきたいと思えます。

こういった形の寄贈に関しては、久之浜第一小学校の生徒さんが福島県立博物館に大きな模型を寄贈したとか、さまざまなところで自分たちも中間に入りながら実施していったところもございませう。またこういった公演をいただいたことによって、震災で被害に遭った太鼓、そして鉦、記憶を残すという意味で当時使っていた衣装などをみんぱくに寄贈させていただいたところもあります。ただ寄贈していたわけではなく、この芸能とか伝統というのはいずれは廃れます。しかしまた復活が行われます。復活したときに、誰も知らないではなく、ここに行けばそういう史料、資料が残っている、そういう場所にしていただければという思いがあつて、今回、私たち久之浜大久自安我楽継承会会員全員の思いをみんぱくに届けたところもあります。

ですので、今後ともご指導いただきながら、このご縁を飛躍させていきたいというのが、私の今後の希望、展望です。

**日高** ありがとうございます。これからの十年、そうですね、自分を取り戻す十年というのも必要なのかもしれないですね。今までは暮らしを取り戻す十年というところで東北地方はとも頑張つてこれらたと思ひます。そうしたなかにおいて、個々の人たちが自分を取り戻す時間は必要になつてくるのかもしれない。

あと、衣装の寄贈、どうもありがとうございます。博物館は記憶の集積地でもありますので、そうした役割をしっかりと果たせるようにしていきたいと思ひます。

いよいよまとめに入つていきたいと思ひます。今日の遠藤さんとの話のなかで幾つかのキーワードがあつたかと思ひます。一つは、「心構え」というところですね。人が人と関わり合おうと決め

たときに、なぜそうしようと思うのか、そのことをしつかりと肝に銘じるといふこと。これはある意味「覚悟」という言葉にも置きかえられるのかもしれないなと思いつながら聞いていたところ  
です。

あと「対話」ですね。これは、いろいろな考えの人たちが当然一つのことをなさそうとするときに出てくるんですけども、そういう人たちがそれぞれの立場に立って理解し合う、そのためにはやっぱり対話をしていくしかない。そうしたところを丁寧にしていく必要性ということも、改めて感じることができました。

さらに、「時間」ですね。今どういう状況に置かれているのか、あるいは今何をすべきなのか。このタイミング含めて、時間の見方、捉え方はとても大事なことになるかなと思えました。

あとは、やはり「継承」ということです。これは未来へのバトンパスということにもなるかと思えます。私たちが未来につないでいくようなりレーが、文化の継承を持続可能にしていく。そうしたこと的重要性も、今日改めて遠藤さんとお話をしながら私なりに学びを得たところになります。

遠藤 ありがとうございます。

日高 またちょっとゆっくりといろいろと話したいところではありますが、ちょうど時間も参りましたので、いよいよ、本日のメインの映像となります。「じゃんがら念仏踊りみんばく公演二〇二一」ということで、できたてはやはやのじゃんがらの踊りをフルバージョンで見ていただきたいと思えます。この映像は、いわき市の波立海岸で収録された映像ということ。先ほどの



2021年5月 波立海岸でのじゃんがら

いわきのPR映像でも出てきた場所でもありません。皆さんにご覧いただけたいと思います。遠藤さん、今日はどうもありがとうございました。遠藤さん、こちらこそありがとうございました。じゃあ準備します。

**日高** ありがとうございます。皆さんも映像を見ながら、これで公演のほうを終わりたいと思います。どうもご視聴ありがとうございました。

本ブックレットは、二〇二一年特別展「復興を支える地域の文化―3・11から10年―」関連の映画会、及び、研究公演を基に作成した。

### 映画会 願いと揺らぎ

日 付：二〇二二年四月十日（土）

上映作品：「願いと揺らぎ」

解説：我妻 和樹（映画作家）

### 映画会 明日に向かって曳け

日 付：二〇二二年四月二四日（土）

上映作品：明日に向かって曳け——石川県輪島市皆月山王祭の現在

解説：川村 清志（国立歴史民俗博物館准教授）

### 研究公演 じゃんがら念仏踊りみんぱく公演

日 付：二〇二二年五月八日（土）

出演：久之浜大久自安我楽念仏踊継承会

解説：遠藤 諭（久之浜大久自安我楽念仏踊継承会）

---

## 地域文化を映し出す

発行日 / 2022年3月14日

編者 / 河村友佳子・日高真吾編

発行 / 大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館日高真吾研究室

編集・印刷 / 株式会社 遊文舎

---



表 紙 2021年、じゃんがら念仏踊り(いわき市波立海岸)  
裏表紙上 「願いと揺らぎ」より  
裏表紙下 2011年、山王祭(輪島市皆月)